

# 福満遺跡 X・XI

－城南小学校校舎増築工事に伴う発掘調査報告－



平成20年 3 月

彦根市教育委員会

## 目 次

### 例言

I	はじめに	1
II	位置と環境	1
III	第10次調査の成果	6
	1 基本土層	6
	2 検出遺構	7
	3 出土遺物	8
	4 出土遺物の検討	17
IV	第11次調査の成果	23
	1 基本土層	23
	2 検出遺構	24
	3 出土遺物	29
V	おわりに	31

写真図版

### 例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が彦根市立城南小学校の校舎増築工事に伴って実施した発掘調査の成果を納めたものである。
2. 本調査の調査地は、彦根市西今町380番地に位置する。
3. 本調査は、第10次現地調査を平成17年11月7日～11月28日、また第11次現地調査を平成18年12月7日～平成19年3月1日と平成19年5月7日～6月4日の2回に分けて実施し、現地調査後にそれぞれ整理調査を行った。
4. 本調査は、彦根市教育委員会文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

参 事 (文化財担当)：中村宇一	副参事 (兼文化財課長)：寺嶋 勲
課長補佐 (兼文化財係長)：谷口 徹	史跡整備係長：志萱昌貢
主 査：広瀬清隆	副 主 査：北川恭子
技 師：大岡由記子	技 師：林 昭男
技 師：三尾次郎	
5. 本調査には以下の諸氏が参加した。

早川圭 (嘱託調査員・現高槻市教育委員会)、中居和志 (現立命館大学大学院)・田川智子・谷川真知子・菅納直人 (以上調査補助員)、吉原正興・中川浩行・清水啓邦・元井義勝・田附清子・西村朝男・野瀬善一・片山正範・浜野勲・大橋俊一・前田宏 (以上作業員)
6. 本書は谷口 (I・III-1・III-2・IV-1・IV-2・V)、早川 (II)、中居 (III-3、III-4)、林 (IV-3) がそれぞれ分担執筆した。
7. 本書で使用した方位は、平面直角座標第IV系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。





て前期には竹ヶ鼻廃寺遺跡・稲里遺跡、中期には妙楽寺遺跡・肥田西遺跡や掘立柱建物の集落である川瀬馬場遺跡があり、いずれも扇状地の扇端より下流の氾濫平野など低湿地に位置している。このように前期・中期の遺跡は扇状地上のものと氾濫平野のものに分けられるが、住居など明確な遺構を伴った集落の多くは後者にあたる。これは扇状地の伏流水が扇端で自噴して湧水となることと、稲作が開始期にあたる当時の灌漑技術のつながりを示すものと考えられ、次に述べる弥生時代後期から古墳時代への流れと比べることでより明らかになる。

弥生時代後期に入ると宇曾川流域で中期から継続する妙楽寺遺跡をはじめ、愛知川流域で鍛冶工房を伴った芝原遺跡、導水施設が確認された屋中寺廃寺遺跡や稲部遺跡などの湖岸に近い集落がみられる一方、新たな集落が扇状地上にも営まれるようになる。犬上川扇状地の扇端に近い堀南遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡で後期から古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されるほか、犬上川・芹川の扇状地上に位置する藤丸遺跡や土田遺跡・木曾遺跡では庄内・布留式土器が竪穴住居から出土している。また、木曾遺跡で後期の直線的な溝が確認されているなど、この時期に入ってようやく扇状地上の開発が進んだことがうかがえよう。すなわち、技術的に未熟であった弥生時代前期・中期には低湿地で扇端の湧水を利用する稲作に留まっていたものが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて用水路の開削など灌漑技術の発達に伴って高乾な扇状地上における稲作が可能になったものと考えられる。今後はまだ確認されていない水田面の検出が課題となる。

弥生時代後期の集落の多くは古墳時代前・中期へと継続するが、前期末には琵琶湖岸に近い荒神山丘陵の稜線上に大型の前方後円墳・荒神山古墳が築かれる。後の犬上・愛智郡の郡境に位置し前方部を琵琶湖に向けた全長120m余の首長墳は、当時の湖東平野の勢力のみならず湖上交通など近江全域に大きな影響を及ぼしたものと考えられよう。

古墳時代後期には同じ荒神山丘陵に荒神山古墳群、犬上川扇状地の扇頂近くに榑崎古墳群・北落古墳群・塚原古墳群（甲良町）など横穴式石室を主体とする群集墳が営まれる。扇状地より下位でも横地遺跡や段ノ東遺跡・葛籠北遺跡で円墳・方墳が検出されており、葛籠北遺跡では木棺直葬が主体であった。なお、福満遺跡に近いJR東海道線の南彦根駅と犬上川橋梁の間には「椿塚」という藪があり、鉄道敷設の際の土取で石室が発見され須恵器の出土が伝わることから福満遺跡周辺にも後期古墳が存在した可能性が高い。また、犬上川河口に位置する八坂東遺跡では後期のものと考えられる埴輪が出土しており、犬上川中・下流域に埋没古墳の存在が想定できる。

飛鳥時代には白鳳寺院として犬上川流域に高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域に屋中寺・下岡部廃寺・普光寺がみられるが、この時期の集落の詳細は明らかでない。奈良・平安時代に入ると、品井戸・竹ヶ鼻廃寺・福満・法土南など多くの遺跡で掘立柱建物が検出されていることから、これらの中に飛鳥時代の建物が含まれる可能性もある。

奈良時代には古代官道である東山道が、福満遺跡の南東約2kmの高宮付近を南西から北西に向かって通過する。これは当時の畿内と東国を結ぶ基幹交通路であり、尼子西遺跡（甲良

町)では道路面や側溝が検出されている。この古代東山道に近い竹ヶ鼻廃寺遺跡では、奈良時代後半に寺院を廃して大型の掘立柱建物群や柵列が設けられている。方形の規模の大きい掘り方を持つ掘立柱建物が軸を統一して配置されているのに加えて、円面硯や銅匙が出土していることから古代犬上郡衙の有力比定地となっている。また隣接する品井戸遺跡からも石帯が出土しており、竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡周辺は古代犬上郡の中心地であったとみられている。

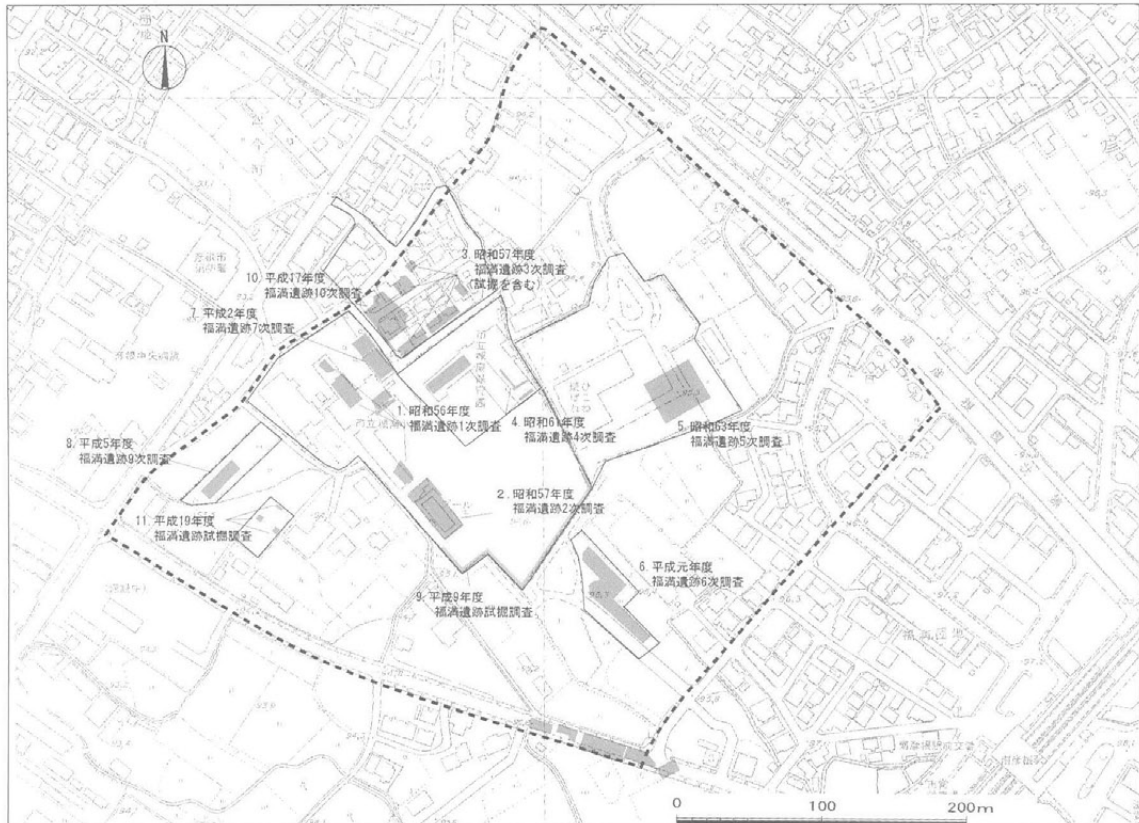


図3 福満遺跡発掘調査位置図

	調査期間	調査の別	調査の原因	調査地	開発面積	調査主体
1	昭和56年4月14日～昭和56年7月21日	発掘調査(試掘・本発掘) 福満遺跡1次調査	彦根市立城南小学校の増改築工事	彦根市西今町380	15400㎡	彦根市教育委員会
2	昭和57年10月22日～昭和57年12月20日	発掘調査(試掘・本発掘) 福満遺跡2次調査	彦根市立城南小学校の増改築工事のプール改築	彦根市西今町380	15400㎡	彦根市教育委員会
3	昭和57年12月10日～昭和58年3月28日	発掘調査(試掘・本発掘) 福満遺跡3次調査	滋賀県住宅供給公社分譲宅地開発	彦根市西今町字久保田386	7191㎡	彦根市教育委員会
4	昭和61年6月1日～昭和61年7月8日	発掘調査(試掘・本発掘) 福満遺跡4次調査	城南保育園改築	彦根市西今町285-1	3900㎡	彦根市教育委員会
5	昭和63年7月4日～昭和63年9月23日	発掘調査(試掘・本発掘) 福満遺跡5次調査	産業振興センター建設	小泉町字福満640ほか	30000㎡	彦根市教育委員会
6	平成元年12月4日～平成2年3月18日	発掘調査(試掘・本発掘) 福満遺跡6次調査	産業振興センター建設	小泉町字福満640ほか	30000㎡	彦根市教育委員会
7	平成2年6月4日～平成2年6月30日	発掘調査(試掘・本発掘) 福満遺跡7次調査	彦根市立城南小学校増改築	彦根市西今町380	15400㎡	彦根市教育委員会
8	平成5年7月6日～平成5年8月13日	発掘調査(試掘・本発掘) 福満遺跡9次調査	共同住宅建築	彦根市西今町字九文目370-1	1200㎡	彦根市教育委員会
9	平成9年8月8日	発掘調査(試掘)	城南小学校グランド拡張水路整備工事	彦根市西今町380	1850㎡	彦根市教育委員会
10	平成17年11月7日～平成17年11月28日	発掘調査(試掘・本発掘) 福満遺跡10次調査	城南小学校校舎増築	彦根市西今町380	15400㎡	彦根市教育委員会
11	平成19年6月19日	発掘調査(試掘)	宅地造成	彦根市西今町372-1、373-1	971.1㎡	彦根市教育委員会

表1 福満遺跡発掘調査一覧

さて、福満遺跡の過去の調査を振り返ると、第2次調査（城南小学校プール）・第3次調査（宅地造成）で縄文時代前期の大歳山式土器が出土しているほか、中期末から晩期の土器が流路から大量に出土し、包含層も確認されている。いまだ明確な遺構は確認されていないが、当時の集落がこの地にあったことがうかがえる。

弥生時代以降では、今回の調査区の東隣にあたる第7次調査や、城南保育園の第4次調査、東隣にあたる品井戸遺跡第1次調査で庄内式並行期の土器が出土しており、第4次調査では竪穴住居も検出されていることから当時の集落が福満遺跡にあったことは間違いない。なお、第5次調査（産業振興センター：燦ばれす）・第8次調査（城南小学校南西隣）で弥生時代後期から古墳時代初頭とみられる方形周溝墓が検出されており、品井戸遺跡でも市道建設に伴う第2次調査で方形周溝墓が検出されていることから、当時の集落と墓域がセットで確認されている。古墳時代後期には方形の竪穴住居が第1・4次調査で検出されているほか、子持勾玉が土坑から須恵器と共に出土している。

奈良・平安時代には福満遺跡の位置は犬上郡の高宮郷あるいは寶田郷に含まれていた。第1次調査で奈良時代後半の須恵器が土坑から出土しており、第4次調査では平安時代頃とみられる掘立柱建物が数棟検出されている。

以上の状況から福満遺跡について、縄文時代後期・晩期については遺物だけでなく具体的な住居等の遺構の確認、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては東隣の品井戸遺跡も含めた集落・墓域の範囲の確認などが課題となろう。また、奈良・平安時代には当時の犬上郡衙である可能性が極めて高い竹ヶ鼻廢寺遺跡や品井戸遺跡との関係をも展望に入れた、継続的な調査が必要になるとと思われる。

ところで、これまで福満遺跡は弥生時代の遺跡という認識がなされることが多かったが、以上のように縄文時代後～晩期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代後半～平安時代に盛期があることが判明してきている。弥生時代の遺跡であることは変わらないが、その中でもかなり末期にあたることになる。福満遺跡＝弥生時代の遺跡というイメージは、土師器＝弥生式土器という認識のあった大正時代に形成されたものであることを、改めて認識しておかねばならない。

#### 〔主要参考文献〕

- 滋賀県立安土城考古博物館2006『扇状地の考古学－愛知・犬上の古代文化－』
- 彦根市教育委員会1982『福満遺跡－発掘調査概要報告書－』
- 彦根市教育委員会1987『福満遺跡－城南小学校改築に伴う福満遺跡第4次調査－』
- 彦根市教育委員会1991『福満遺跡第7次調査－市立城南小学校増築工事に伴う－』
- 彦根市2007『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世

### Ⅲ 第10次調査の成果

#### 1 基本土層

調査地は、犬上川右岸の標高94m前後に位置しており市街化の著しい地域であるが、かつては豊かな田園地帯が広がっていた。今回の調査でも、学校建設時にもたらされた50cm前後の客土（Ⅰ層）を除去すると、その下から旧耕作土（Ⅱ層）と床土（Ⅲ層）が露見した。こ

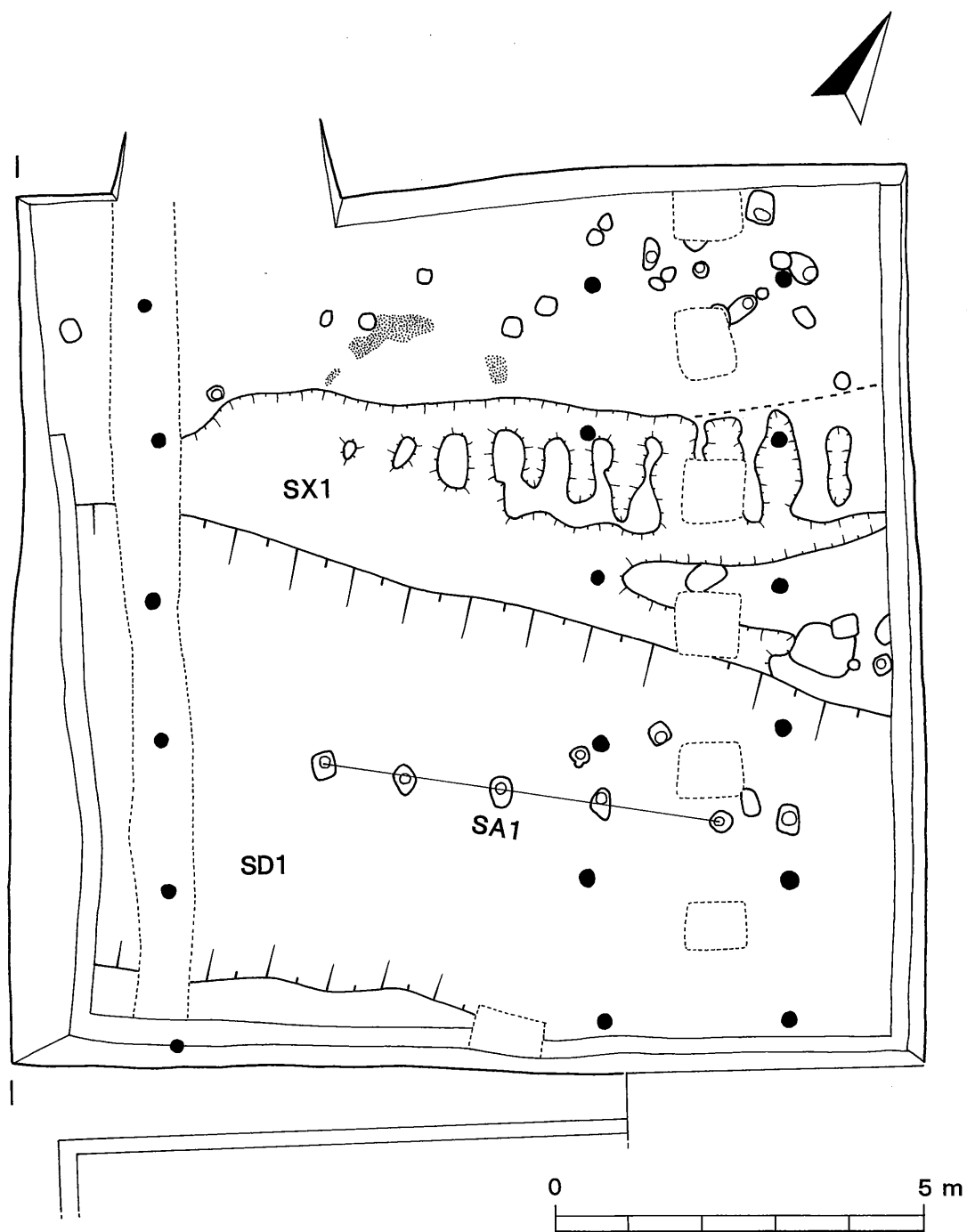


図4 第10次調査遺構全図



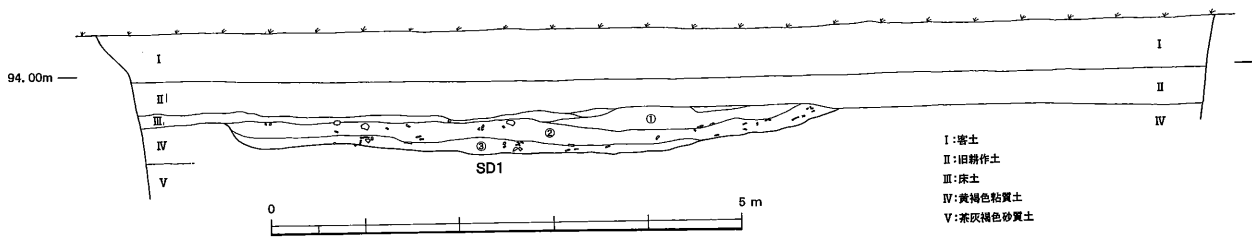


図5 SD1断面図

の耕作土は比較的厚くおよそ40cmを測る。遺構面（IV層）はこの直下に広がっていた。

遺構面は黄褐色粘質土からなるが、南に向かって灰色を強めしだいに不安定化する。南隅の側溝で行った深掘りでは、遺構面はおよそ40cmで茶灰褐色の砂質土（V層）に変わることを確認している。かつて、南に向かって低平地が広がっていたのであろう。今回検出した浅く広い溝（SD1）は、北の微高地と南の低平地の変換ラインを追尾するように流れており、微高地からは多量の土器が流入あるいは投棄されていた。

## 2 検出遺構

10次調査は校舎北隅の増築に伴うもので、対象面積は約140㎡であった。客土（I層）と耕作土（II層）については重機で掘削をおこなったが、この間、客土中から打ち込まれた旧校舎時代の木製基礎パイルや掘り方が整然と出土し、我々を驚かせた。パイルの短いスパンが廊下、長いスパンが教室であったと考えられる。

検出した遺構は、古墳時代初頭と古墳時代後期に大きく二分される。古墳時代初頭の遺構には、柱穴群と溝（SD1）がある。柱穴群は調査区北側の安定した地山が広がる一帯で確認された。比較的小規模な柱穴で、柱穴本体は直径15cmから20cm、掘り方は方形または楕円形を呈している。柱穴に黒褐色粘質土、掘り方には黒灰褐色粘質土がそれぞれ充填されている。建物としてのプランをいろいろ検討したが、現状ではプランを確定するまでには至らなかった。これら柱穴群の間で、焼土の広がりを確認している。図に点描した箇所がそうである。屋内になるのか屋外に位置するのか判然としないが、土が焼けて炭化物片が散在していた。

溝（SD1）は柱穴群の南に、東西方向の流路を刻んでいる。既述のように、北の微高地と南の低平地の変換ラインに沿って流れていたようである。溝の幅は6m前後、深さ0.4mで浅く広い皿状を呈している。この溝内の堆積土は3層が識別された。①灰褐色粘質土、②黒褐色粘質土、③黒灰褐色粘質土である。①灰褐色粘質土は、SD1の堆積土というよりも古墳時代後期のSX1の埋土であり、同期の遺物が若干混入している。この頃になっても完全に埋没することなく、わずかな窪地を残していたSD1に、SX1が合流して形成した土層である。②黒褐色粘質土と③黒灰褐色粘質土は、北側から多量の遺物が流入ないし投棄されて堆積していた。円礫の混入も比較的多く見られた。遺物は、一応②層と③層で分層して取り上げたが、その後の整理調査で相互に接合できるものがあるなど、溝への流入遺物という性格から明確に時期差を判別できないことが明らかとなった。なお、SD1には縄文時代晩期の遺物が

わずかながら混入しているのが留意される場所であるが、これまでの調査で今回の調査区の北東方向で同期の遺構の存在を確認しており、同所方面からの流入遺物と考えられる。

古墳時代後期の遺構は、溝状遺構（SX1）と柵（SA1）である。この時期の遺構の埋土は、古墳時代初頭が黒褐色系であったのに対して、灰色を強めているのが特徴である。溝状遺構（SX1）は、北の微高地から南西方向に流れ、古墳時代初頭以来の窪地SD1に合流する辺りで大きく広がって開口する。幅2m、深さ0.2m程度の浅い溝状遺構であるが、溝の底部が両側と直行する中央で断続的にわずかに深くなり、溝底がちょうど梯子の形状を呈している。人為的なものと考えられるが、その意図は不明である。浅い溝ではあったが、溝内より土師器・須恵器・土錘・瓦などの破片が出土し、動物の歯の骨片を採集した。瓦片の出土は気になる場所であるが、これまでの調査では同期の明確な遺構は確認していない。

柵（SA1）は、埋没したSD1の上にSX1とほぼ並行して設けられたものである。5柱穴、5.4m間を検出した。柱穴の柱穴本体は直径10cmから15cm、掘り方は方形または楕円形を呈しており、柱穴に灰褐色粘質土、掘り方には灰色粘質土がそれぞれ充填されている。柱穴の柱間は、西から1.1m、1.3m、1.3m、1.7mを計測した。

### 3 出土遺物

福満遺跡10次調査においては、SD1を中心としてコンテナ37箱程度と面積の割に多数の遺物が出土した。ここでは、SD1出土遺物を中心に出土遺物の内容を述べる<sup>1</sup>。

#### SD1 出土土器

##### (1) 壺 [図6～7：1～20]

1・4～16は広口壺で、1・4・5・7は明確な垂下状口縁をもち、6・8～14は口縁端部に面をもつ。17は二重口縁壺、18～20は短頸直口壺である。

1～3は、東海地方のいわゆるパレススタイル壺の影響を受けた壺であるが、いずれも在地製の胎土をもつ。1は、貼り付けた垂下状口縁をもち、頸部には断面三角形の突帯を付している。口縁部・肩部は櫛描直線文・波状文とヘラ状工具による列点によって装飾される。肩部があまり張らないことから、最大径を下位にもつ下ぶくれの器形になると思われる。2は、上位にヘラ状工具による等間隔の直線文を施し、間をヨコハケ状の弱い直線文が埋め、下位には、長方形工具による羽状刺突文、櫛描直線文、断面円形工具による刺突文、直線文、と丁寧に加飾する。3は球状の体部をもつ壺で、肩部には櫛描直線文とハケ工具による列点で加飾され、底部は突出し内面を細かなハケにより調整する。4は、2条の沈線と3本1セットの棒状浮文をもつ小型の壺と思われるが、小型の器台の可能性もある。胎土はやや粗めである。5は、端面に薄い3条の擬凹線と3個1セットの円形浮文をもつ。6は、口縁端部外面にヘラ状工具による列点をもち、内面には櫛状工具による列点を密に施す。

1 図示するにあたっては、①口縁片：口縁径1/3以上の残存、②底部：底の完存または端部の残存、③特徴的な遺物、のいずれかに合致する個体を抽出した。

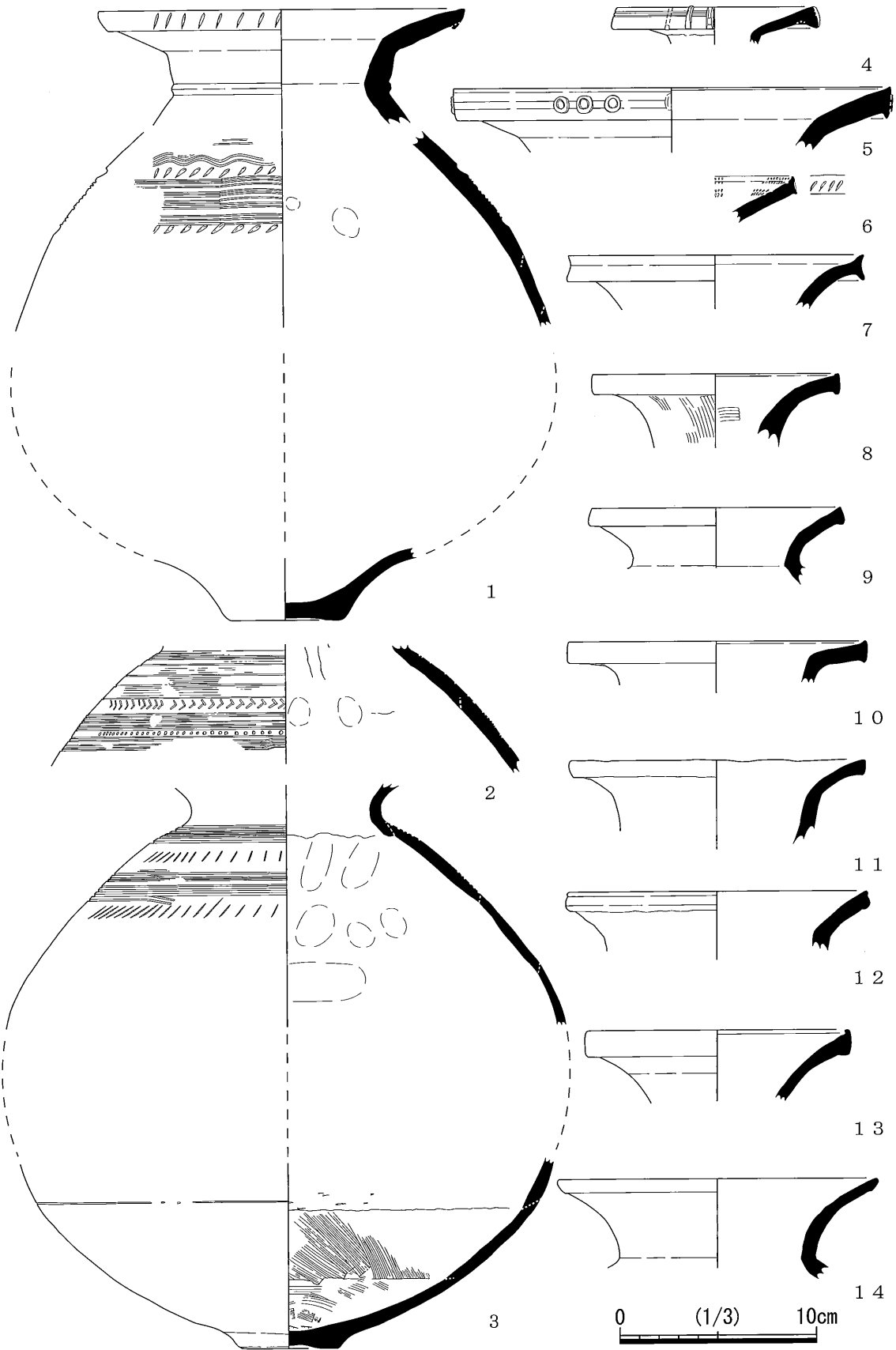


图6 SD1出土遺物(壺)

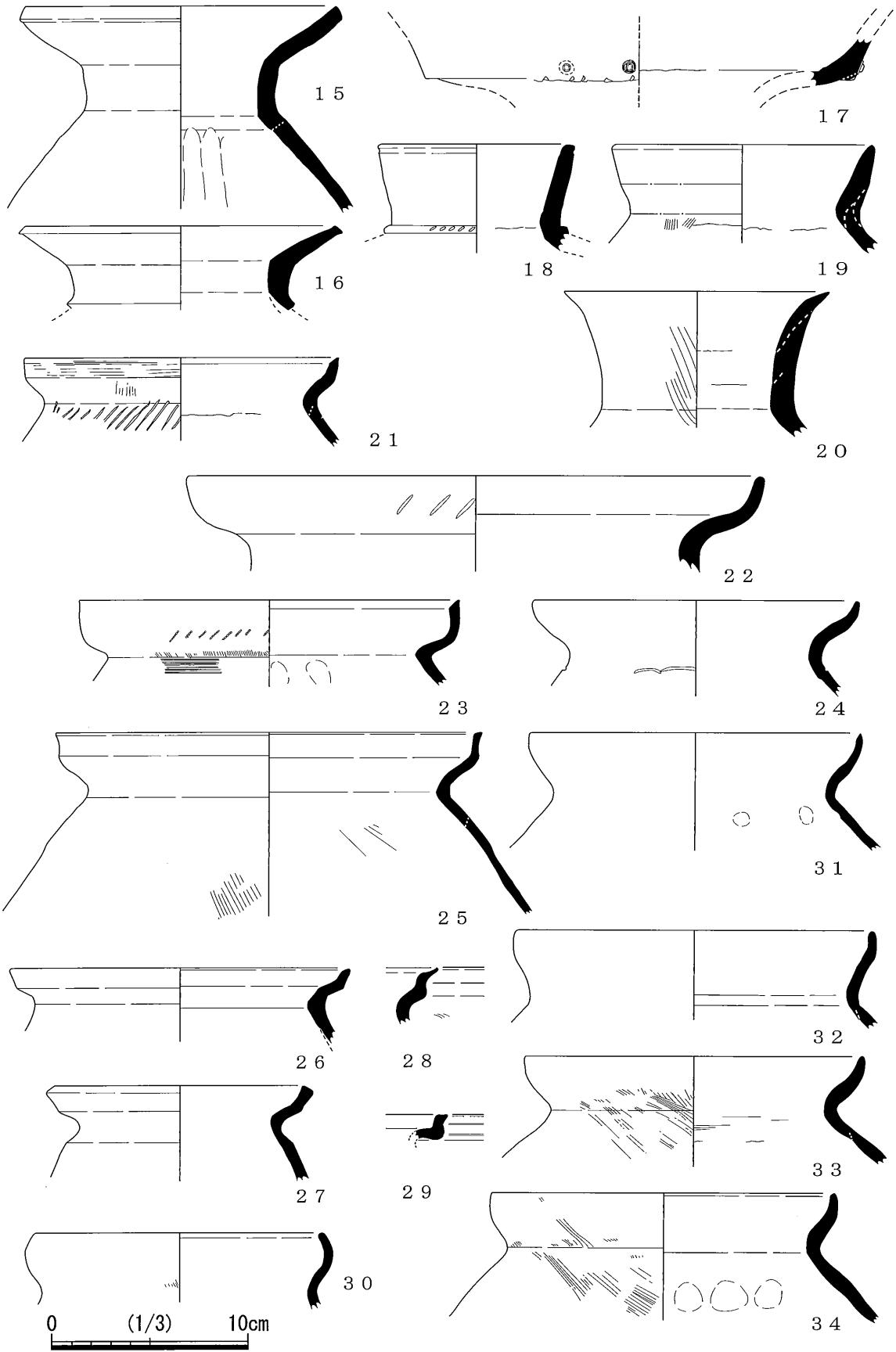


图7 SD1 出土遺物 (壺・甕)

7は、端面が強いナデによって上下に突出する。8・9は、やや屈曲しながら外反し、端面が小さく垂下する。10・11・12は、やや強めに屈曲して外反する。12は端面に擬凹線が施される。13・14は緩やかに外反し、13は端部内面に沈線をもつ。

15・16は、直立する頸部をもち、明瞭な屈曲をもって外反する広口壺である。15は、体部内面を縦方向にナデ上げる。16は、頸部と体部接続部を突帯状に接続している。

17は、屈曲部にヘラ状工具による刻みを入れ、その上位に円形浮文を付す加飾性の高い二重口縁壺である。18は、頸部に断面円形の突帯を貼り付け、列点を刻む。口縁端部外面には沈線が1条巡る。19は、軽く外反しながら単純に端部をおさめる。20は、緩やかに外反して端部をつまみ出す。弥生時代後期の長頸壺の系譜をひいていると思われる。

## (2) 甕〔図7～8：21～50〕

21～34は受口状口縁甕、35～43はくの字状口縁甕、44～47は北陸系有段口縁甕、48～50はS字状口縁甕である。

21～24は外面に装飾を持つ受口状口縁甕である。21は、肩部にヘラ状工具による明瞭な刻み目をもち、口縁外面は横方向のハケで調整する。22は白色の胎土が特徴的で、緩やかな屈曲をもつ口縁部外面にヘラ状工具による刺突列点文を加える。23は緩やかな屈曲をもつ口縁外面に櫛状工具による刺突列点文を加え、肩部には直線文を施す。24は、肩部にヘラ状工具によるゆるい波状文をもつ。25～29は、明瞭な屈曲をもつ受口状口縁甕で、いずれも無文である。28は、明瞭な屈曲をもち、端部を極端につまみ出す。29は、明瞭な屈曲をもち、口縁部外面にはヘラ状工具による沈線を2条もつ。表面白色、断面黒褐色の胎土をもつ、湖南地域で製作された受口状口縁甕である。30は、頸部から緩やかに屈曲しながら、内湾し袋状となる。こうした形態は類例が少なく、また白色の胎土は21に近似して特徴的である。ここでは受口状口縁甕の一形態としたが、類例を待ちたい。31～34は、緩やかな屈曲をもつ受口状口縁甕で、いずれも口縁端部は丸く処理し装飾はない。

35～41までのくの字状口縁甕のうち、35・38はやや内湾気味の口縁をもち、他は外反気味の口縁をもつ。37は、頸部にヘラ状工具による波状文がみられる。41は、端部に粘土を追加して小さく下方に突出する。42は、頸部に刺突列点文を施し、端部はやや強めにつまみ出す。43は、ゆるく内湾気味に立ち上がり、内面にやや突出して上面に水平面を形成する。受口状口縁甕の変形と考えられる。

44～47は、北陸地域に通有の有段口縁甕である。44は、外面に擬凹線、口縁内面の連続指頭圧痕がみられるが、摩滅が著しいため頸部内面のヨコハケの存在は不明である。45とともに胎土に多量の砂礫を含み、搬入品であると思われる。45～47では、内面の連続指頭圧痕や頸部内面のケズリ残しはみられない。45・47の口縁外面には摩滅しながらも擬凹線の痕跡が残るが、46では確認できない。

48～50は、東海地域に通有のS字状口縁甕である。いずれも砂礫を多く含む特徴的な胎土を有しており、搬入品であると思われる。外面には粗いタテハケ、肩部のヨコハケを施す。

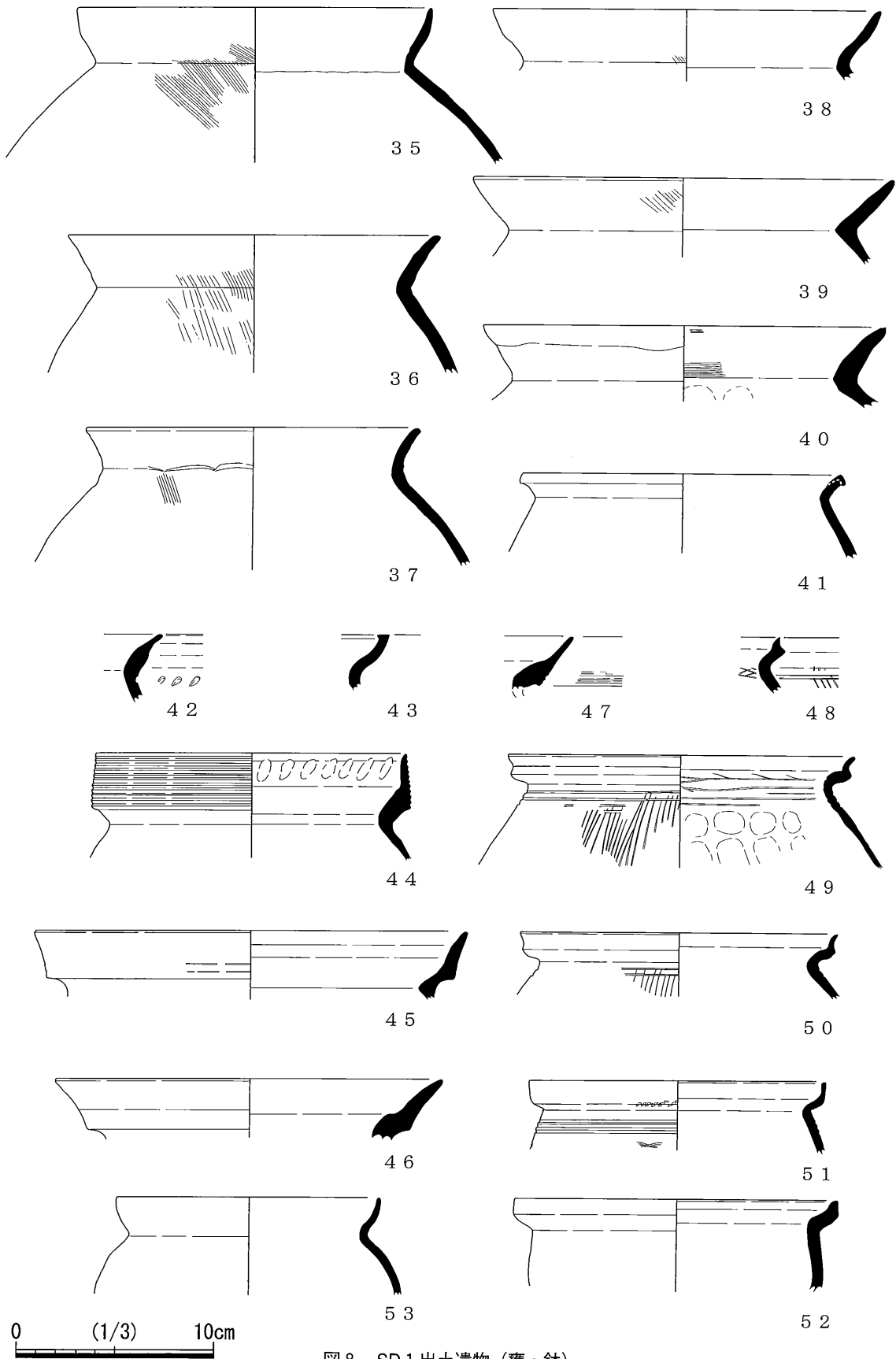


图8 SD1出土遺物(甕・鉢)

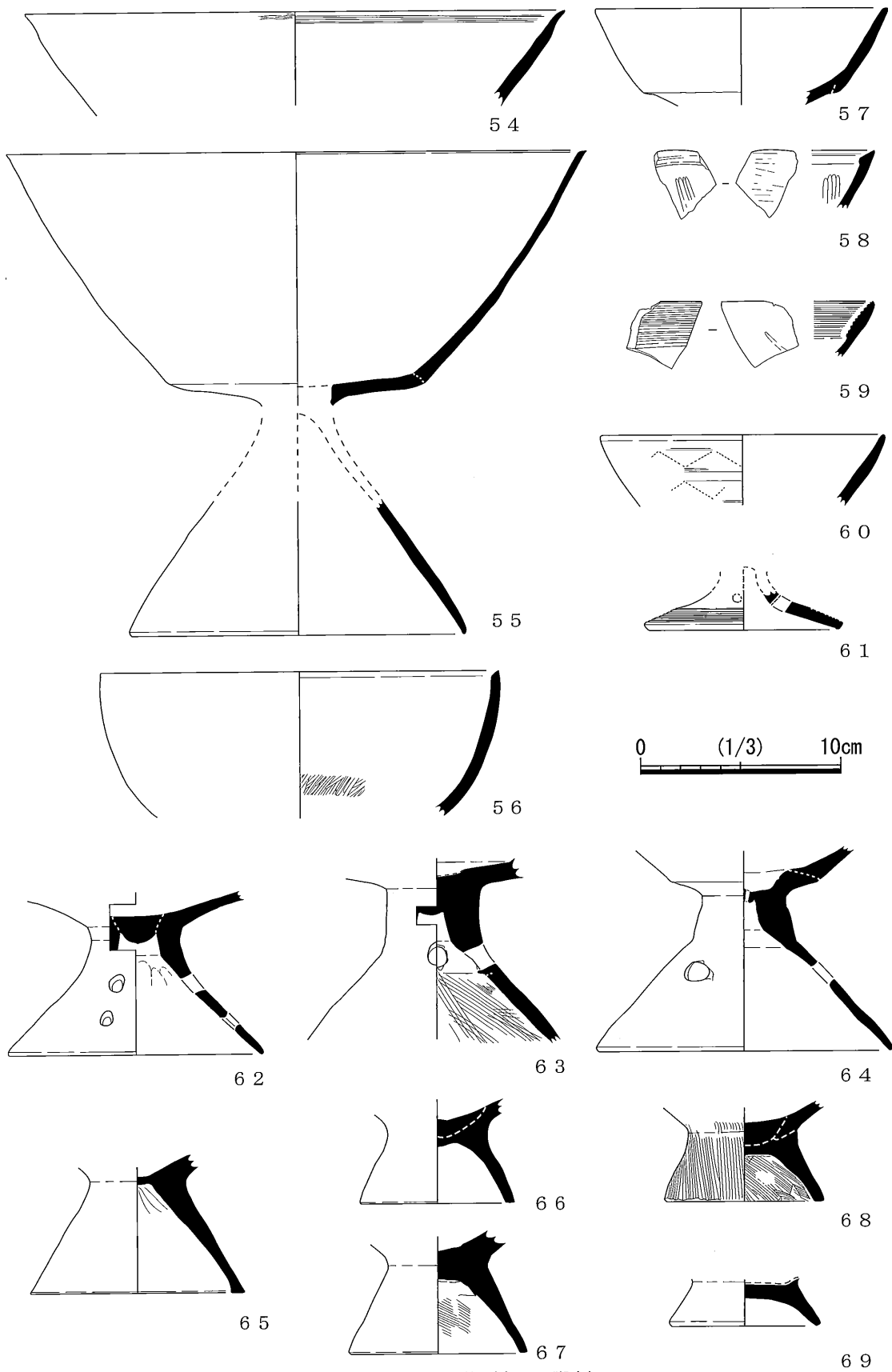


图9 SD1 出土遗物 (高环·脚台)

48・49では、頸部内面に粗いヨコハケが見られるが、50では摩滅のため確認できない。49は、肩部内面に強いナデがみられる。

### (3) 鉢〔図8：51～53〕

鉢は、東海地域で「鍋」として分類されていることからわかるように、煮沸具として使用する小型の甕として認識できる。口縁部の破片のみでは甕との峻別は困難である。

51は、直立する口縁の頸部に櫛状工具による押引列点文を施し、肩部には櫛描直線文、櫛描波状文が確認できる。表面白色、断面黒褐色に近い焼成で、湖南地域で製作された受口状口縁鉢である。52・53では、摩滅により調整・加飾は確認できない。52は明確に屈曲して短く立ち上がる口縁をもち、53は緩やかに屈曲する口縁部をもつ。

### (4) 高坏〔図9：54～64〕

54～60は高坏の坏部、61～64は脚部である。いずれも東海地域からの影響が強い。

54・55は深い坏部をもつ高坏である。54は、端部両面をハケ調整し、つまみ出しぎみに処理する。55は、坏部がやや内湾気味に立ち上がり口縁端部に面をもち、脚部も同様にやや内湾する、約24cm程度に復元できる大型の高坏である。56は、椀形高坏の坏部で、端部には面をもち、内面には斜め上方向のミガキが残る。57は、55に比べて浅めの坏部をもち、稜は口縁部の接合により突出する。58・59は、端部を肥厚させて沈線を施す、いわゆる西濃形高坏である。58は、端部内面を斜めに肥厚させ薄い沈線を施し、内面にはミガキが残る。59は、端部内面に粘土を貼り付けて肥厚させ、10条単位のクシ状工具で多条沈線を施す。外面にミガキが残る。60は、クシ状工具による横方向の直線文ののち、山形刺突文を施す。一部に赤彩が残る精製高坏である。

61は、60などの精製高坏に伴う脚部で、端部外面には8条の櫛描直線文を施す。62は、ゆるやかに外反する脚部に2孔単位の3方透かしをもつ。63は、屈曲する脚部に4方透かしをもち、脚部内面はハケ調整である。62・63とも、坏底部は粘土を充填している。64は、明確に屈曲して直線的に開く脚部に3方透かしをもち、坏底部には刺突孔をもつ。

### (5) 脚台〔図9：65～69〕

65は、直線的に開き、端部が肥厚する。胎土は高坏と同程度の精良さでありながら透かしがなく、台付壺などの底部と考えられる。66～69は、台付甕の脚台である。68には内外面にハケ調整が明瞭に残る。69は、胎土の粗さから台付甕の脚部の可能性が高いが、他と比べて低脚のため確証はもてない。

### (6) 器台〔図10：70～73〕

70は、端面を大きく下方に垂下させ、擬凹線を施した後に3本単位の棒状浮文を四方に貼り付ける。71は、端面を上下に大きく拡張し、擬凹線を施した後に3個以上単位の円形浮文を貼り付ける。72は、端面をやや拡張ぎみとするが、装飾は行なわない。73は、やや小型となる器台の脚部に2孔単位の3方透かしをもつが、孔の1つは貫通しない。

### (7) その他の器種〔図10：74～83〕



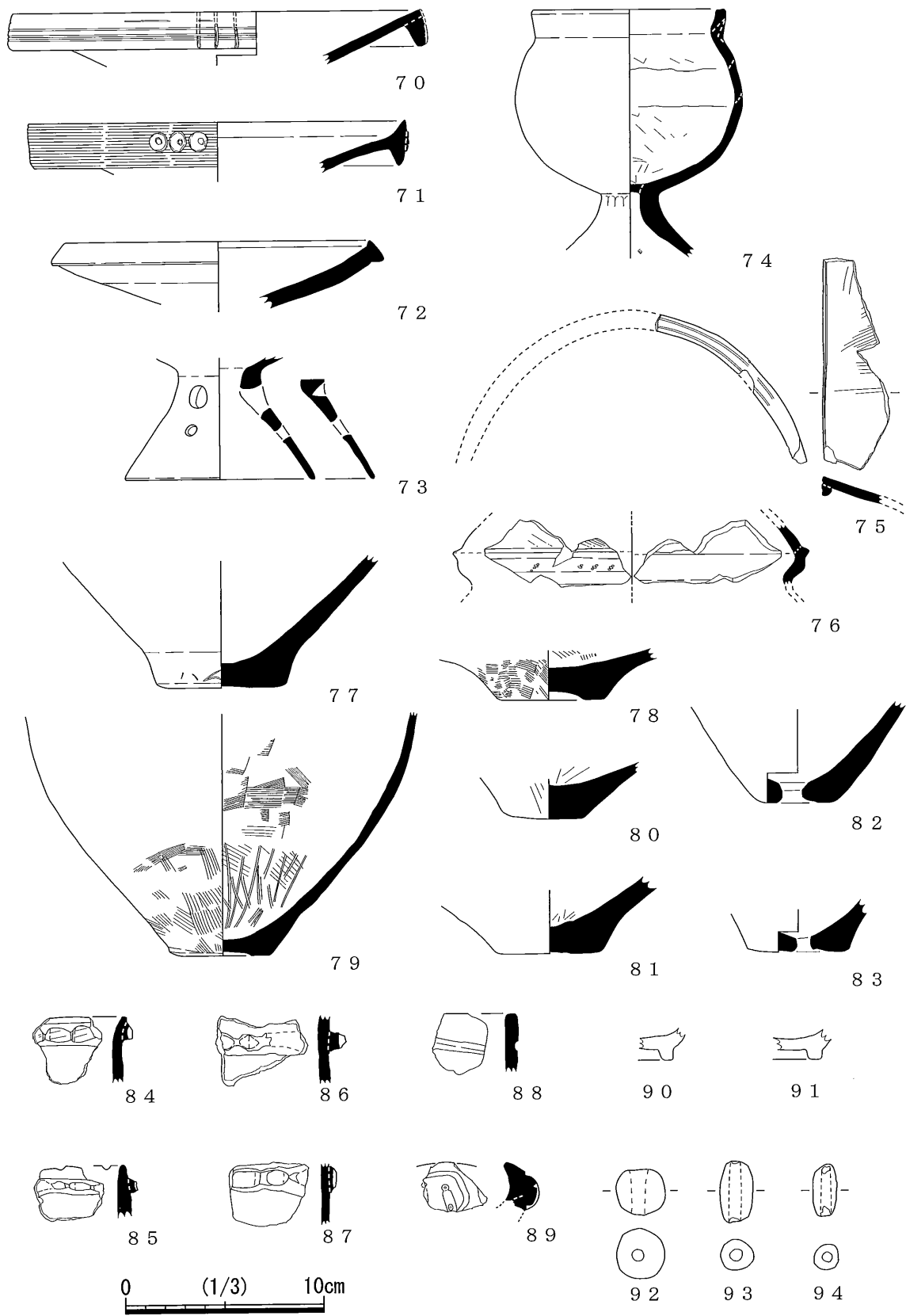


図10 SD1 出土遺物 (器台・その他)

74は台付鉢である。口縁部は、色調の違う粘土によって厚みを増している。鉢部底部は粘土で充填し、脚部は緩やかに外反する。

75・76は手焙形土器である。75は覆い部であり、端部を垂下させて2条の沈線を施す。76は鉢部と覆い部の接続部分であり、受口状屈曲部にクシ状工具による刺突列点文を施す。

77～81は底部である。77・78は、形態や胎土から壺の底部となる可能性が高い。一方、79～81は外面にススが付着していることから、甕である可能性が高い。中でも79は、内面に2種の単位の異なるハケ調整の後に、半裁竹管状の工具（おそらくヨシカススキ）による平行線が放射状に施されている点に特徴がある。

82・83は有孔鉢である。どちらも焼成前穿孔である。

(8) 縄文土器、須恵器、土製品〔図10：84～94〕

84～89は、縄文時代晩期の突帯文土器深鉢である。84・85・87はD字刻目突帯で、86はO字刻目突帯である。84は、面をもつ口縁端部に近接して二枚貝刻みの突帯をもち、突帯断面形状は台形を呈する。85は、ヘラによる刻み目を入れた口縁端部よりやや下がった位置に突帯を貼り付ける。86は断面かまぼこ状の突出度の高い突帯をもつ。87は低い断面かまぼこ状の突帯をもつ。88は口縁端部と平行しない沈線をもち、89は湾曲した端部に半円形に巡る沈線の内部に刺突を3箇所確認できる。88・89とも器形は不明である。

90・91はいずれもSD1最上層から検出された高台をもつ須恵器坏身である。須恵器甕の体部片も数点出土している。92は球状の土玉、93・94は土錘である。

(1)～(8)の遺物のうち、在地製土器の胎土は流紋岩質由来の砂礫を中心にチャートなどの堆積岩類も多く含み、わずかに石英などを含む場合が多い。全体的に胎土は粗い。

SX1 出土須恵器、土製品、瓦〔図11：95～108〕

95～101は須恵器で、95・96が坏蓋、97・98がかえりをもつ坏身で、99から101は高台をもつ坏身である。102～107は土錘である。形態から大きく2種類に分類でき、102～105は外形が長方形をなし、106・107は外形が長楕円形をなす。また、大きさや孔の直径からも分類が

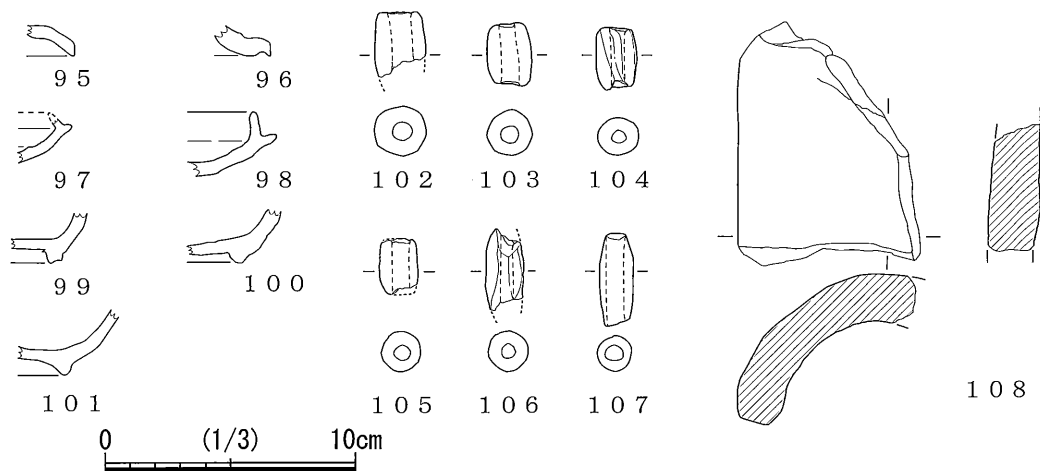
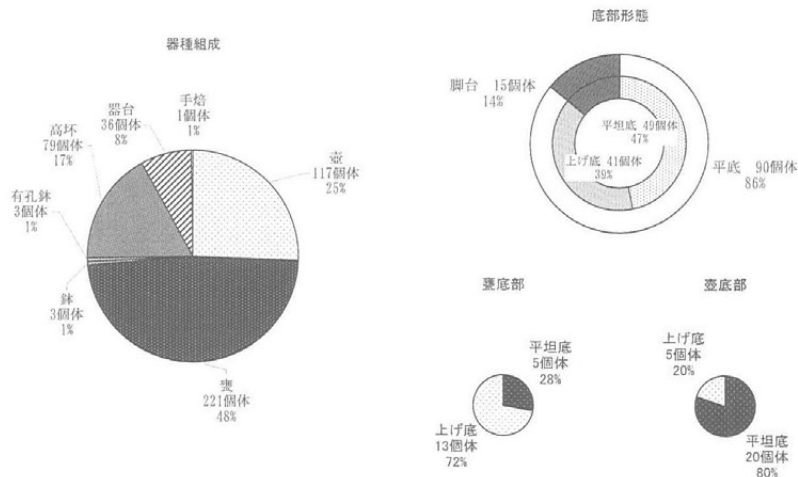


図11 SX1 出土遺物（須恵器・土錘・瓦）

表2 出土土器の統計



可能と思われるが、点数が少なく詳細は不明である。いずれも胎土は精良である。108は丸瓦。実測可能なのは1点のみであった。外面はナデ調整、内面には布目が残る。

#### 4 出土遺物の検討

##### 1. SD 1 出土土器の器種構成

福満遺跡第10次調査において検出されたSD 1 出土土器は、犬上川流域における庄内式併行期の土器様相を示す貴重な資料群である。そのため、実測図として提示した資料以外の出土資料についても統計として提示したい。ただし、出土遺物は全体的に細片が多く、焼成の甘いものも多いために表面の摩滅が著しい。そのため、器形や調整などを基とする詳細な形式分類を行なうことは困難であり、やや分類に幅をもたせざるを得なかった。

統計に用いた出土土器総数は570個体である<sup>2</sup>。全体の比率としては、壺が117個体で25%、甕が221個体で48%、鉢・有孔鉢がそれぞれ3個体で1%ずつ、高坏が79個体で17%、器台が36個体で8%、手焙形土器・台付鉢がそれぞれ1個体で1%ずつ、である。

特徴としては、壺・甕・高坏で全体の大多数を占め、鉢はごく少なく、また甕が壺の2倍程度の比率であることが挙げられる。鉢が少数であるのは、受口状口縁をもつ鉢では口縁部の破片のみでは甕との判別が困難であることが考えられるが、それ以外の特徴は畿内地域での弥生時代後期以降の器種構成のあり方と大きな齟齬はない。

壺は、第6・7図1～16のような広口壺が70個体と圧倒的多数を占め、他の壺は個体ごとに形態の差異が大きい。甕は、受口状口縁甕が124個体と圧倒的多数を占め、ついでくの字状口縁甕が59個体と続き外来系甕は5個体と全体的に少ない。受口状口縁甕の中にも頸部の屈曲の強弱や装飾の有無によって数種類に分類は可能であり、とくに頸部の屈曲が弱く装飾をもたないものが多数を占める。くの字状口縁甕の口縁端部の形態には多様性があり、一部には退化した受口状口縁甕と判別の困難なものも存在する。鉢は有孔鉢と合わせても6個体に

2 1個体の認定は、端部の残存幅が3cm以上で器種が判明する場合、高坏・器台は柱状部と坏部や受け部が残存する場合、を基準とし体部片は1個体と認めないこととした。

とどまり、前述のように甕と判別困難な個体も多いと思われる。高坏は柱状部が多く形状の不明なものが多いものの、有稜高坏が20個体確認でき多数を占める。いずれも深い坏部をもつ第9図55のような高坏が多数を占め、第9図56のような椀形高坏は少数だと思われる。さらに、第9図58・59のような西濃形高坏も客体的に存在する。器台も高坏同様に柱状部が多いが、端部の拡張面に装飾を施す第10図70・71のようなものよりも、装飾を施さないものの方が高い傾向があるようである。しかし、端部片のみでは確実に形状の判明するものは少数にとどまる。

こうした統計とは別に底部形態の統計を行ない、台付甕の構成比率について考察する。台付甕は東海地域との関わりのある現われであると考えられ、湖北地域ではとくに「く」の字状口縁台付甕が受口状口縁甕より数で凌駕するとする論考もある(古川1991)。当資料では甕の全形を把握することはできないが、ある程度時間の限定できる当資料中における台付甕と平底甕のありかたは、湖東地域と湖北地域を結ぶ犬上川流域の地域的様相を示す重要な要素となる。当資料中の平底・脚台の総数は105個体である<sup>3</sup>。底部でも器種の判別可能な個体は前述の統計に含めたが、胎土の粗い壺の存在や表面が摩滅して調整などを確認できない場合も多いために、壺・甕・鉢の区別が十分できない個体が多数存在した。底部形態は、大きく分けて第10図77～81のような平底と第9図66～69のような脚台に分類可能であり、平底は第10図78・79のような上げ底と第10図80・81のような平坦底で構成される。平底は90個体で86%を占め、脚台は15個体で14%を占める。平底のうち、平坦底は49個体、上げ底は41個体とほぼ同数でやや平坦底が多い傾向がある。平底で壺・甕の器種が判別可能なのは、平坦底で壺20個体・甕5個体、上げ底で壺5個体・甕13個体であった。不明な平底46個体中、平坦底は24個体、上げ底は22個体であった。判別可能な平底の壺と甕の比率は、平坦底4：1、上げ底2.6：1であるので、不明な平底中平坦底壺約19個体・甕約5個体、上げ底壺約6個体・甕約16個体程度を含んでいると考えられる。つまり、判別可能な平底と合わせて、平底をもつ壺約50個体・甕約40個体前後の個体数であったといえる。もちろん、甕の中には鉢の底部も含むと考えられるが量的に多数を占めることはない。一方で、統計可能な脚台は15個体にとどまっているうえに、台付壺・鉢の脚台を含む可能性も否定できない。よって、当資料中における台付甕はあくまで客体的な存在であり、主流を占める存在ではなかったといえる。こうした比率は、湖東地域の代表的集落である東近江市斗西遺跡での台付甕のありかたにある程度近いといえるが、より湖北地域に近い様相をもっている。これは、湖東地域北部にあたる犬上川流域という福満遺跡の位置とも矛盾しない。

## 2. SD1出土土器の編年的位置

SD1からは、当遺跡周辺以外から搬入されたと考えられる土器とともに、庄内式併行期を中心とする時期の土器が出土した。その詳細は前述の通りであり、ここではこれらの土器を近江地域や周辺地域の編年と対応させることで、SD1出土土器の編年的位置について考察

3 1個体の認定は、平底・上げ底の底部は底部径の3分の1の残存、脚台は端部の残存幅が3cm以上とした。

する。近江地域の編年として、植田文雄氏による斗西・近江古墳時代様式編年（以後「植田編年」と略す）（植田1988、1993、1994a・b、2007）、伴野幸一氏による野洲川流域編年（以後「伴野編年」）（伴野2001、2003、2006）を援用する。また周辺地域の編年として、東海地域は赤塚次郎氏による廻間編年（以後「赤塚編年」）（赤塚1990、1997）、北陸地域は堀大介氏による越前・加賀地域編年（以後「堀編年」）（堀2003、2006a・b）を援用する。

壺では、第6図1が下ぶくれの体部と推定されることから、廻間式の影響が見られることは間違いないが、在地製の壺のためにそれ以上の詳細な対応を迫うことは困難である。

受口状口縁甕では、第7図22・23が口縁外面に列点文をもち、植田編年の甕A1にあたる。植田編年では甕A1の消滅などの要素をもって庄内式併行期の開始に位置づける。こうした認識は、受口状口縁甕の変遷としては間違いないと思われるが、甕A1は庄内式併行期に属す一括遺物に含まれる事例も多い<sup>4</sup>。こうしたことから、受口状口縁甕の変遷は漸移的であった可能性を指摘できる。第7図29が植田編年甕A2もしくはA3であることも、甕A1～3が共伴することの傍証になろう。また、頸部が明瞭な屈曲をもたない受口状口縁甕が多数を占める状況は、湖北地域での受口状口縁甕のあり方に近似する。一方でくの字状口縁甕は、内外面ハケ調整の在地的な様相をもち、いわゆる畿内第5様式系甕の影響は認められない。そのため、畿内地域との併行関係の直接比較は困難である。また、甕の体部片に庄内形甕や布留形甕のものと思われる内面をケズリ調整する資料もみられない。

外来系の甕としては、北陸系有段口縁甕とS字状口縁甕がある。第8図44は堀編年の甕A9～12類つまり、月影式～白江式にあたるが、頸部内面のヨコハケの有無が摩滅のために確認できず絞り込むことは困難である。しかし、第8図45～47には口縁内面の連続指頭圧痕はなく、外面の擬凹線も弱く、12～15類に位置づけが可能である。よって、これらの甕は長く見積もって風巻・月影2式～長泉寺・白江2式にかけてのものと考えられる。

S字状口縁甕は口縁部外面の押引刺突文はないものの、肩部のヨコハケは頸部に近接していることから、いずれも赤塚編年のS字状口縁甕B類でも古相を呈する。つまり、これらは赤塚編年の廻間Ⅱ式でも最初期に該当するものと考えられる。

高坏は、西濃形高坏をはじめとして東海地域の影響が強い。第9図の深い坏部をもつ55や深めの56、西濃形高坏58・59、加飾する60・61は、赤塚編年の廻間Ⅰ-3～4に位置づけられる。また、60・61は植田編年の高坏D類にあたり、斗西Ⅱ期の最初期に該当する。

器台は、第10図70・71が端面を大きく拡張して浮文を貼り付けることから、伴野編年の器台A類でも新相にあたり、時期は伴野編年Ⅵ期に該当する。

手焙形土器は、第10図75は多い部の端面をあまり拡張せず、76も屈曲部に櫛描列点文を施すことから、いずれも古相を呈している。

以上の各編年との対応を総合し、SD1出土遺物の帰属時期を決めていきたい。各編年では

4 桜内遺跡79SB57（滋賀県教委・滋賀県協会1989）、野洲川左岸遺跡SH01・03（滋賀県教委・滋賀県協会1995）出土遺物など。

それぞれの編者によって各地との併行関係はわずかながらズレが存在している。そのため、こうした編年ごとの併行関係を整理した森岡秀人氏・西村歩氏の成果を援用すると、SD1出土土器の帰属時期は、畿内地域の庄内式併行期古段階新相から中段階に収まるものと考えられる。時期にやや幅が存在するのは、SD1が流路であった可能性が高いためであり、そのため一括性については必ずしも高いとはいえない。しかし、東海・北陸地域と畿内地域を結ぶ重要な要地にありながら当該期資料の空白地帯であった犬上川流域において、時期幅がある程度限定でき、かつ内容の揃った当資料は学術的に非常に重要な意味をもつ。今後の資料の充実に期待したい。

〔主要参考文献〕

- 赤塚次郎 1990「V考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター  
 赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター  
 植田文雄 1988「古式土師器の編年」『能登川町埋蔵文化財調査報告書 第10集 斗西遺跡』能登川町教育委員会  
 植田文雄 1993「古墳時代土器の検討」『能登川町埋蔵文化財調査報告書 第27集 斗西遺跡(2次調査)』能登川町教育委員会  
 植田文雄 1994a「古墳時代土器論」『滋賀考古』第12号 滋賀考古学研究会  
 植田文雄 1994b「近江湖東地域の庄内～布留式併行期の土器編年」『庄内式土器研究会Ⅷ』庄内式土器研究会  
 植田文雄 2007『「前方後方墳」出現社会の研究』学生者  
 伴野幸一 2001「下長遺跡出土土器の編年的位置」『下長遺跡発掘調査報告書Ⅸ』守山市教育委員会  
 伴野幸一 2006「近江地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター  
 古川 登 1991「北部近江における「く」の字状口縁台付甕について」『考古学フォーラム2』  
 堀 大介 2006a「越前・加賀地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター  
 堀 大介 2006b「古墳成立期の土器編年に関する基礎的研究」『越前町文化財調査報告書Ⅰ』越前町教育委員会  
 森岡秀人・西村歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター

挿図番号	遺構	種類	全長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	色調
92	SD1	土玉	2.3	2.5	0.6	淡黄褐色
93	SD1	土錘	3.1	1.7	0.6	淡白黄褐色
94	SD1	土錘	2.6	1.2	0.5	灰白色
102	SX1	土錘	2.6	2.1	0.8	黒色(外) 淡白黄褐色(内)
103	SX1	土錘	2.6	1.8	0.7	淡白黄褐色
104	SX1	土錘	2.5	1.6	0.6	淡白黄褐色
105	SX1	土錘	2.2	1.6	0.7	淡白黄褐色
106	SX1	土錘	3.2	1.5	0.6	淡白黄褐色
107	SX1	土錘	3.7	1.4	0.7	淡白黄褐色

表3 土製品観察表

挿図 番号	遺構	器種	口径 (cm)	器高 (cm) *	外面調整	内面調整	色調	残存率	備考
1	SD1	壺	18.4	<30.8>	ナデ/クシガキ	摩滅	明黄褐色	全周	
2	SD1	壺	—	(6.5)	ユビオサエ	クシガキ	暗赤褐色	—	
3	SD1	壺	5.1(底径)	<28.5> 残存復元	ナデ/クシガ キ・列点	ユビオサエ ハケ/ナデ	淡黄褐色(外) 黒灰色(内)	ほぼ 全周	
4	SD1	壺	9.8	(1.9)	摩滅	摩滅	淡赤褐色	1/4	
5	SD1	壺	22	(3.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	1/6	
6	SD1	壺	—	(2.4)	摩滅	刺突列点	淡白黄褐色	—	
7	SD1	壺	14.8	(2.75)	ナデ	ナデ	淡赤褐色 黒灰色(断面)	1/2	
8	SD1	壺	12.4	(3.7)	タテハケ	ヨコハケ	淡黄灰色	1/8	
9	SD1	壺	12.5	(3.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	明黄白褐色	1/6	
10	SD1	壺	15	(2.1)	摩滅	摩滅	淡黄褐色	1/6	
11	SD1	壺	15	(4.6)	摩滅	摩滅	明黄褐色	1/2	
12	SD1	壺	15	(3.1)	ナデ	ナデ	明黄白褐色	1/10	
13	SD1	壺	13.1	(3.8)	摩滅	摩滅	明黄褐色	1/4	
14	SD1	壺	16.2	(5.1)	摩滅	摩滅	明赤褐色	1/5	
15	SD1	壺	16.6	(10.5)	摩滅	ユビオサエ	明黄褐色	全周	ゆがむ
16	SD1	壺	16.4	(4.3)	ナデ	ナデ	淡赤褐色	1/2	
17	SD1	壺	—	(2.4)	摩滅	摩滅	暗赤褐色	—	
18	SD1	壺	9.8	(5.4)	ナデ	ナデ	明白黄褐色 灰褐色(断面)	1/4	
19	SD1	壺	13	(5.45)	ナデ/ハケのち ナデ	ナデ	淡赤黄褐色 灰白色(断面)	全周	
20	SD1	壺	13.4	(6.9)	ハケ/ナデ	ナデ	淡黄褐色 白灰褐色(断面)	1/3	
21	SD1	甕	16	(4.7)	ハケ/ヨコナデ	ナデ	明白黄褐色	1/4	
22	SD1	甕	29	(4.9)	ナデ/刺突列点	摩滅	淡白黄褐色	1/6	
23	SD1	甕	19.3	(4.1)	ナデ/ハケ	ヨコナデ/ ユビオサエ	赤白褐色(外) 淡赤黄褐色(内)	1/3	
24	SD1	甕	16.6	(4.95)	摩滅	摩滅	明赤褐色	1/2	
25	SD1	甕	21.6	(9.1)	ハケ	ハケ	明赤褐色	全周	
26	SD1	甕	17.4	(3.8)	摩滅	摩滅	淡白黄褐色	1/4	
27	SD1	甕	13.6	(4.8)	摩滅	摩滅	明赤黄褐色	1/3	
28	SD1	甕	—	(2.8)	ハケ	ナデ	淡黄褐色	—	
29	SD1	甕	—	(1.3)	ナデのちヘラガ キ	ナデ	白褐色(表) 黒色(断面)	—	湖南製
30	SD1	甕	14.6	(3.6)	ハケ	摩滅	淡白黄褐色	全周	
31	SD1	甕	17	(6)	摩滅	ユビオサエ	暗黄褐色	1/2	
32	SD1	甕	18.4	(5)	摩滅	摩滅	淡黄褐色	1/3	
33	SD1	甕	17.2	(5.2)	ハケ/ナデ	ハケ/ナデ	暗赤褐色	1/4	
34	SD1	甕	17.8	(6.3)	ハケ	ユビオサエ	明赤褐色(外) 暗赤褐色(内)	1/3	
35	SD1	甕	17.8	(7.8)	ハケ	摩滅	淡黄褐色	1/2	
36	SD1	甕	18.8	(7)	ハケ	摩滅	淡黄褐色	1/7	
37	SD1	甕	16.8	(7.1)	ハケ	摩滅	明白灰褐色	1/4	
38	SD1	甕	19.5	(3.6)	ハケ	摩滅	明黄赤褐色	1/4	
39	SD1	甕	21	(4)	ハケ	摩滅	明赤褐色	1/4	
40	SD1	甕	—	(3.8)	ナデ	ハケ/ユビ オサエ	淡赤褐色 灰黒色(断面)	3/4	
41	SD1	甕	16	(4)	摩滅	摩滅	淡赤褐色(外) 淡黄褐色(内)	1/8	
42	SD1	甕	—	(3.5)	摩滅	摩滅	赤茶褐色	—	
43	SD1	甕	—	(2.85)	ナデ	ナデ	淡黄褐色	—	
44	SD1	甕	15.6	(5.4)	擬凹線	ユビオサエ	暗灰黄褐色	1/2	北陸系
45	SD1	甕	21.8	(3.5)	擬凹線	ナデ	暗灰黄褐色	1/6	北陸系
46	SD1	甕	19.6	(3.1)	ナデ	ナデ	淡黄褐色	1/8	北陸系
47	SD1	甕	—	(3.7)	擬凹線	ナデ	淡黄褐色	—	北陸系
48	SD1	甕	—	(2.85)	ハケ/ナデ	ハケ/ナデ	淡灰褐色	—	東海系
49	SD1	甕	14.4	(5.6)	ハケ/ナデ	ユビオサエ/ ハケ/ナ	暗黒灰褐色	1/4	東海系
50	SD1	甕	16	(3.2)	ハケ/ナデ	ナデ	暗黒灰褐色	1/8	東海系
51	SD1	鉢	15	(3.5)	ナデ	ナデ	淡黄白褐色 灰黒色(断面)	1/10	
52	SD1	鉢	16.4	(4.4)	摩滅	摩滅	淡黄褐色(外) 明赤黄褐色(内)	1/8	
53	SD1	鉢	13.2	(4.9)	摩滅	摩滅	明赤黄褐色	1/8	
54	SD1	高坏	23.1	(4.8)	ハケ	クシガキ	赤褐色 淡黄褐色	1/8	

表4-1 出土土器観察表

挿図 番号	遺構	器種	口径 (cm)	器高 (cm)*	外面調整	内面調整	色 調	残存率	備 考
55	SD 1	高坏	28.8 (口径) 17.7 (底径)	<24>	摩滅	摩滅	淡黄褐色 淡黒灰色 (断面)	1/3	
56	SD 1	高坏	19.8	(7.2)	摩滅	ミガキ	明黄褐色	1/3	
57	SD 1	高坏	14.4	(4.85)	摩滅	摩滅	明赤黄褐色	1/3	
58	SD 1	高坏	—	(2.9)	ハケのちナデ	ミガキ	白灰褐色	—	胎土精良
59	SD 1	高坏	—	(2.8)	ミガキ	クシガキ	明赤褐色	—	胎土精良
60	SD 1	高坏	3.5	(3.5)	クシガキ	摩滅	明白黄褐色	1/6	胎土精良
61	SD 1	高坏	9.4 (底径)	(1.9)	ナデ/クシガキ	摩滅	淡赤褐色 (外) 淡黄褐色 (内)	1/6	胎土精良
62	SD 1	高坏	12.8 (底径)	(8.1)	摩滅	ユビオサエ	淡黄白褐色	全周	
63	SD 1	高坏	—	(9.2)	摩滅	ハケ	淡黄褐色	—	
64	SD 1	高坏	14.8 (底径)	(10.2)	摩滅	摩滅	淡黄褐色	全周	
65	SD 1	脚台	10.7 (底径)	(6.9)	ナデ	ナデ	淡黄褐色	全周	
66	SD 1	脚台	8 (底径)	(5.2)	摩滅	摩滅	淡赤褐色	1/3	
67	SD 1	脚台	8.8 (底径)	(6.1)	摩滅	ハケ	明黄白褐色 (外) 淡黒灰色 (内)	全周	
68	SD 1	脚台	8 (底径)	(5)	ハケ	ハケ	暗灰褐色	全周	
69	SD 1	脚台	7.6 (底径)	(2.3)	摩滅	摩滅	淡赤褐色	全周	
70	SD 1	器台	16.4	(2.7)	クシガキ	摩滅	淡赤褐色	1/4	
71	SD 1	器台	18.8	(2.6)	擬凹線	摩滅	暗黄褐色	1/8	
72	SD 1	器台	15.2	(3.4)	摩滅	摩滅	明黄褐色	全周	
73	SD 1	器台	9.5 (底径)	(6.1)	摩滅	摩滅	淡赤褐色	2/3	
74	SD 1	台付鉢	9.8	(12.1)	摩滅	ハケ	淡赤褐色	1/2	
75	SD 1	手焙	—	(7.5)	ハケ	摩滅	淡灰褐色 黒灰褐色	1/2	
76	SD 1	手焙	—	(3)	刺突列点	摩滅	赤褐色 (外) 暗赤黒褐色 (内)	—	
77	SD 1	底部	6.6 (底径)	(6.4)	摩滅	摩滅	明赤褐色 (外) 灰褐色 (内)	1/2	
78	SD 1	底部	5 (底径)	(2.5)	ハケ/ナデ	ハケ	明赤褐色 (外) 黒灰色 (内)	全周	
79	SD 1	底部	4.8 (底径)	(12.1)	ハケ	ハケ	暗黄褐色	全周	
80	SD 1	底部	3.8 (底径)	(2.8)	ハケ/ナデ	ハケ	淡赤褐色 淡黄褐色	全周	
81	SD 1	底部	5.3 (底径)	(5.3)	摩滅	ハケ	淡黄褐色 (外) 淡黄灰色 (内)	全周	
82	SD 1	有孔鉢	3.5 (底径)	(5.1)	摩滅	摩滅	明黄褐色 暗黄褐色	全周	
83	SD 1	有孔鉢	5.2 (底径)	(1.9)	摩滅	摩滅	暗黄褐色	全周	
84	SD 1	縄文深鉢	—	(3.3)	摩滅	摩滅	淡黄褐色	—	
85	SD 1	縄文深鉢	—	(2.75)	摩滅	摩滅	淡黄褐色	—	
86	SD 1	縄文深鉢	—	(3.5)	摩滅	摩滅	黄赤褐色 (外) 淡灰白色 (内)	—	
87	SD 1	縄文深鉢	—	(3.7)	摩滅	摩滅	淡黄灰色	—	
88	SD 1	縄文	—	(3)	摩滅	摩滅	淡灰褐色	—	
89	SD 1	縄文	—	(2.5)	摩滅	摩滅	淡灰黄褐色	—	
90	SD 1	坏身	—	(1.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	—	自然釉
91	SD 1	坏身	—	(1.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	—	自然釉
95	SX 1	坏蓋	—	(1.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰白色 (外) 灰白色 (内)	—	
96	SX 1	坏蓋	—	(1.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰白色 (外) 灰茶色 (内)	—	
97	SX 1	坏身	—	(1.75)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黒灰色 暗赤茶色 (断面)	—	
98	SX 1	坏身	—	(2.55)	ヨコナデ/回転 ヘラケズリ	ヨコナデ	青灰色 (外) 灰白色 (内)	—	
99	SX 1	坏身	—	(1.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰色	—	
100	SX 1	坏身	—	(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰白色	—	
101	SX 1	坏身	—	(2.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰白色	—	
108	SX 1	瓦	—	(6)	ナデ	布目	淡白褐色	1/2	

\*器高の0は残存高、<>は復元高を表す。

表4-2 出土土器観察表



## IV 第11次調査の成果

### 1 基本土層

第11次調査は、T1からT6の6箇所調査トレンチを設けたが、T6を除くと、いずれも教室棟や体育館・給食室の各建物の拡幅に伴う調査であり、建物の周囲には上下水や電気関係の配管・マンホールが多様に敷設されていたため、それらを避けての限定的なトレンチ設定とならざるを得なかった。こうした制約の中での調査であったが、旧地形の復元は可能であった。

各トレンチとも学校建設時の幾度かの客土と、その下の旧耕作土（または旧畑土）の直下に遺構を形成する地山が存在した。第10次調査区の北側に広がっていた黄褐色粘質土からなる微高地は、今回の調査ではT1とT3の南側、T6の北東側で確認したが、その他の地域では茶灰褐色砂質土からなる低平地が広がっていた。また、T1・T3・T6で見られた微高地も、安定した地山を形成しているのはT3南側とT6北東側に限られており、その他の地では黄褐色粘質土の層は薄く、20～30cm下は灰褐色砂層に変化した。つまり発達した微高地とは言い難いものであった。したがって、この微高地上や周辺の低平地に刻まれた遺構は、第10次調査で見られたような密集性は認められず、かなり閑散としたあり様を示していた。

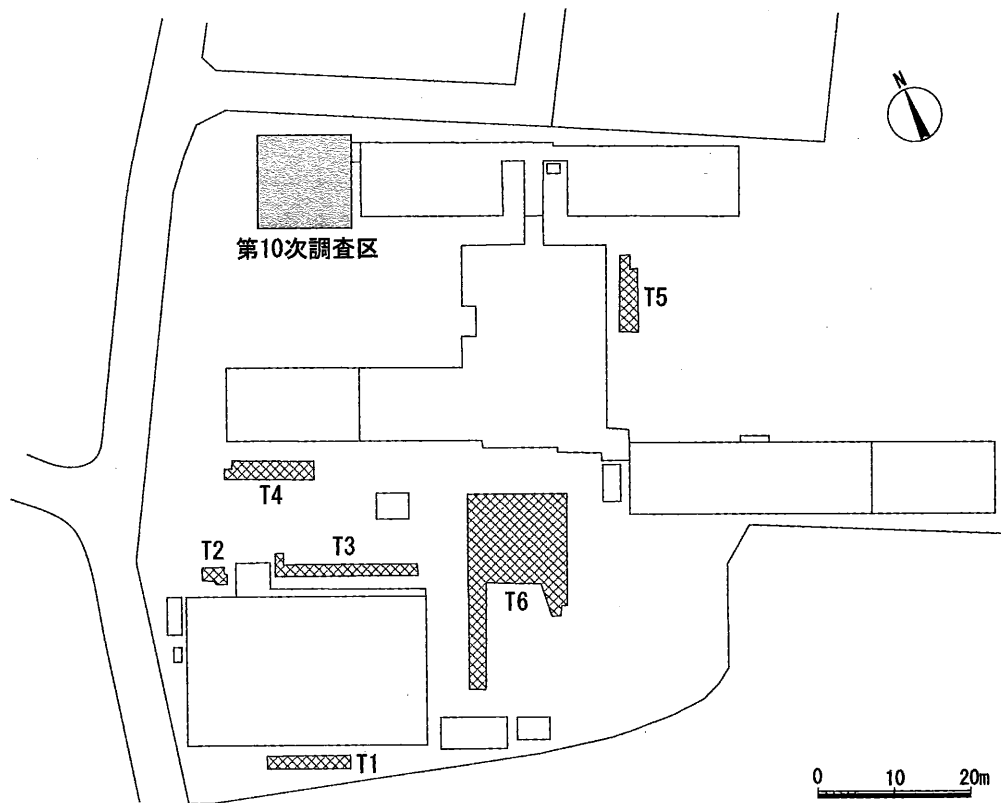


図12 調査トレンチ設定図

## 2 検出遺構

### T1 トレンチ

トレンチ中央付近で、若干の柱穴と1条の溝を検出した。柱穴は比較的小規模なもので、柱穴本体は直径15cmから20cm、掘り方は方形または楕円形を呈している。柱穴に黒褐色粘質土、掘り方には黒灰褐色粘質土がそれぞれ充填されていた。およそN-16°-Wの建物を想定したが、狭長なトレンチ調査であり確定するまでには至らなかった。溝は北東から南西に、やや弧状に流路を刻んでおり、断面は浅い椀状を呈し、黒灰褐色粘質土が充填されていた。遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

### T2 トレンチ

T1とは反対に、体育館の北東側に設けた小さなトレンチである。地山は先述のようにやや不安定な茶灰褐色砂質土が広がり、東隅で南北に流れる溝の肩を検出した。溝は浅い椀状を呈し、溝内は黒灰褐色砂質土の単純層であったが、この層内より緑釉陶器片1点(図21:1)が出土している。

### T3 トレンチ

T3 トレンチ南側は安定した微高地が広がっており、柱穴や溝(SD1)・土坑(SK1)などが存在した。柱穴は比較的小規模なもので切り合い関係が認められたが、柱穴本体は直径15cmから20cm、掘り方は楕円形を呈している。柱穴に黒褐色粘質土、掘り方には黒灰褐色粘質土がそれぞれ充填されていた。溝(SD1)は、弧状を呈して南東から北西に流路を刻む。断面は幅70cm、深さ20cmの椀状を呈し、埋土は2層が識別される。上層の①暗灰褐色粘土と下層の②灰褐色粘土である。溝底は酸化鉄や酸化マンガンの沈着により硬化していた。この溝は東隅で深い溝状遺構と合流しているが、両者に切り合い関係は認められなかった。

土坑(SK1)は、客土直下より切り込まれた新しいもので、幅120cm、深さ60cmを測り、断面が椀状を呈している。埋土は3層で、①灰褐色粘質土、②灰褐色砂質土、③暗灰褐色砂質土が識別される。①灰褐色粘質土には近世以降の瓦片などが混入しており、②・③層は地山の茶灰褐色砂質土が混入して砂質化が著しい。この土坑辺りから北西側では、地山の砂質化が顕著となり、比高を減じるとともに遺構が存在しなくなった。

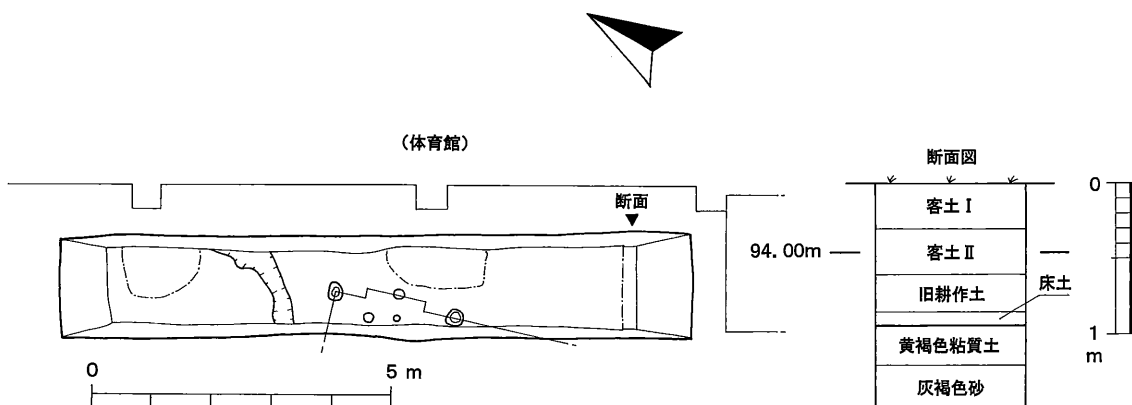


図13 T1 トレンチ遺構図

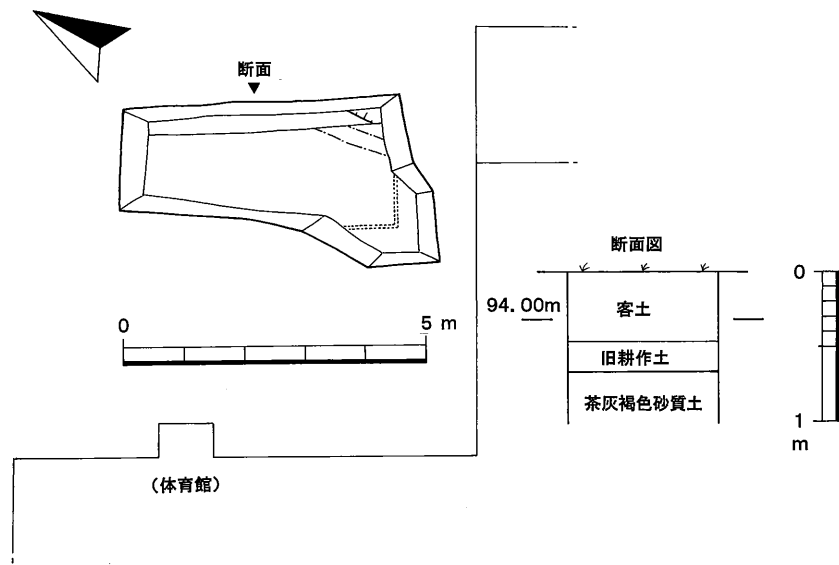


図14 T2トレンチ遺構図

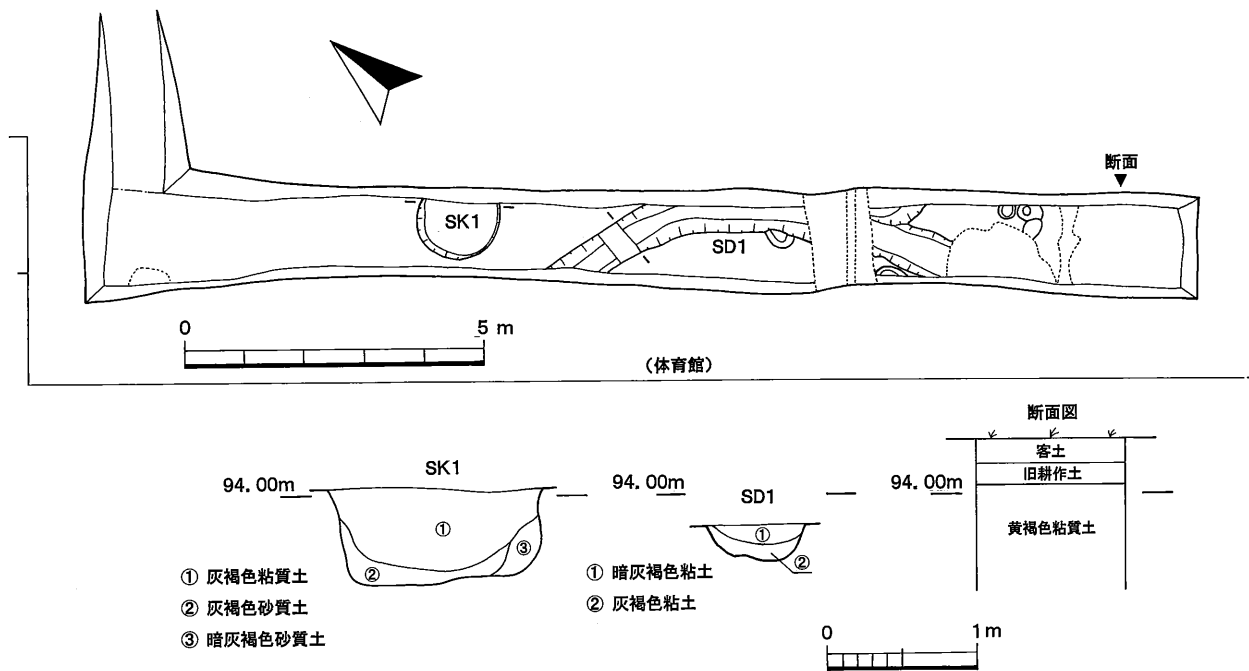


図15 T3トレンチ遺構図

#### T4 トレンチ

T4 トレンチは給食室の拡張工事に伴って、給食室の西に設けたトレンチである。地山は全体に茶灰褐色砂質土が広がり不安定なもので、遺構も東辺で柱穴1個と漆喰井戸1基を検出したに留まった。柱穴の本体は直径20cm、掘り方は直径40cmの円形を呈している。柱穴に黒褐色粘質土、掘り方には黒灰褐色粘質土がそれぞれ充填されていた。

漆喰井戸は、客土1と客土2の下に広がる灰褐色粘質土より切り込まれている。灰褐色粘質土は旧畑土と考えられる土層であるが、明治以降の陶磁片が混入するところから、畑となる以前は屋敷地であったと推測され、漆喰井戸も屋敷の一隅に設けられていた井戸の可能性が考えられる。漆喰井戸の掘り方は径130cmの円形で、その内に径80cm、高さ約50cm、厚さ10cmの円筒形の漆喰製井筒を積み上げている。現状で3段を確認している。掘り方は、⑦灰褐色砂礫、⑧灰褐色粘質土の2層が存在する。また、井筒内には①黄灰色粘質土、②炭化土、③黄灰褐色粘質土、④黒褐色粘質土、⑤黒灰色粘質土、⑥黒灰褐色粘質土が層を重ねている。④～⑥層には、この井戸を廃棄した際に投入したと思われる漆喰片が多量に混入していた。井筒は、さらに上に1段ないし2段積まれていたものと考えられる。

このような漆喰は、山土・砂利・消石灰を混合し、そこにニガリ液などを加えて製作する。水を加えて練ると硬化する水硬性セメントとして、古来より広く使用されてきたものである。彦根でも江戸時代以降、こうした井戸のほか池底や風呂などの水周り、便所や軒下の犬走りなど、現代のセメントに似た頻度で、各方面に多様に用いられたことが知られる。

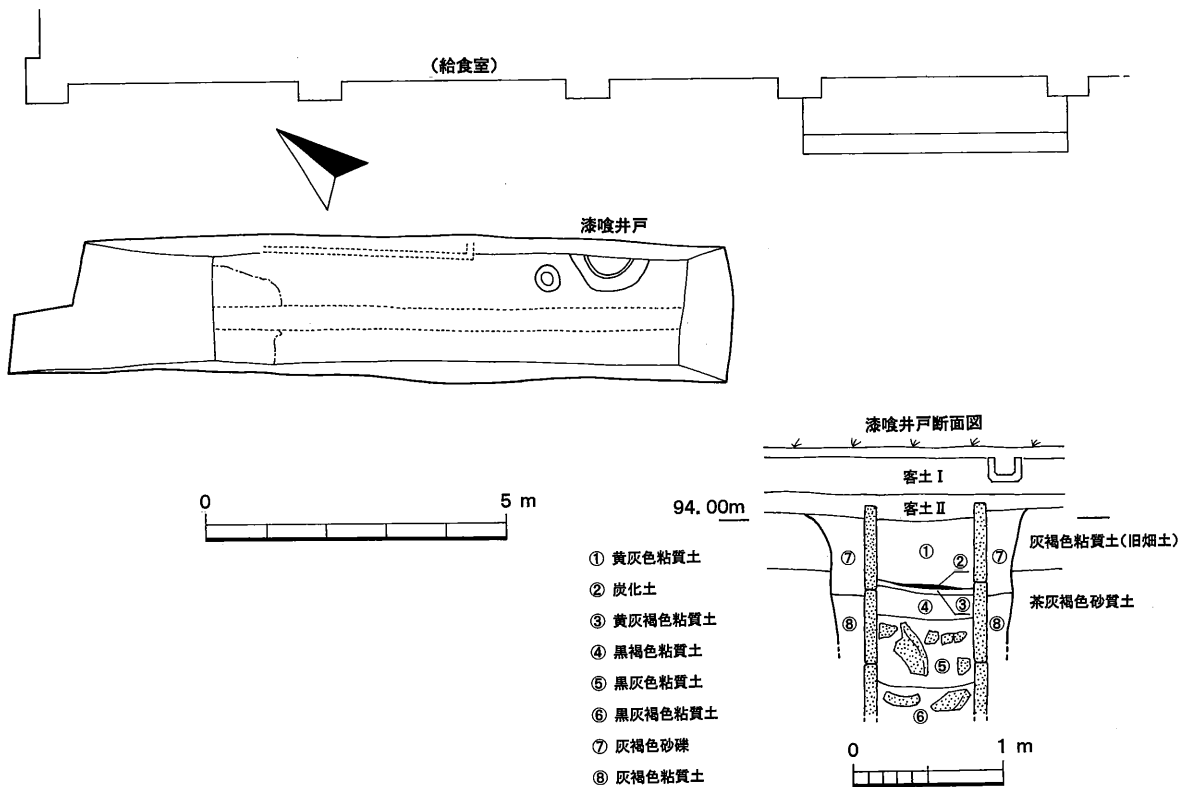


図16 T4 トレンチ遺構図

## T5 トレンチ

T4 トレンチと同様に、地山全体が茶灰褐色砂質土で形成されており、2 個の柱穴を検出したのみである。2 個の柱穴は切り合い関係にあり、柱穴の本体は直径15cm、掘り方は直径30cmの楕円形を呈している。柱穴に黒褐色粘質土、掘り方には黒灰褐色粘質土がそれぞれ充填されていた。

## T6 トレンチ

T6 トレンチは旧校舎の解体を待って平成19年度に実施した調査区である。調査区の北東側に黄褐色粘質土の微高地があり、対する南西側はしだいに比高を減じて茶灰褐色砂質土からなる低平地が広がる。微高地は、旧校舎の解体による攪乱でそのほとんどが破壊されていた。一方、低平地は水田としての土地利用のため旧耕作土が約40cm形成されており、試掘溝を入れたが遺構をほとんど確認できなかった。したがって今回の実質的な調査は、旧校舎の解体による攪乱を免れた微高地南西辺のわずかな地に限られることになった。

調査では、その南一帯で落ち込み (SX1) を検出した。落ち込みの径は 8 m 以上あり、深さは40cmに満たない浅く不定形なものである。埋土は①黒褐色粘質土、②黒灰褐色粘質土、③黄灰褐色粘質土が識別される。この各土層から古墳時代初頭および後期の遺物が混在する形で出土した。微高地からの流入によると考えられ、微高地上に同期の遺構が広がっていると推測される。

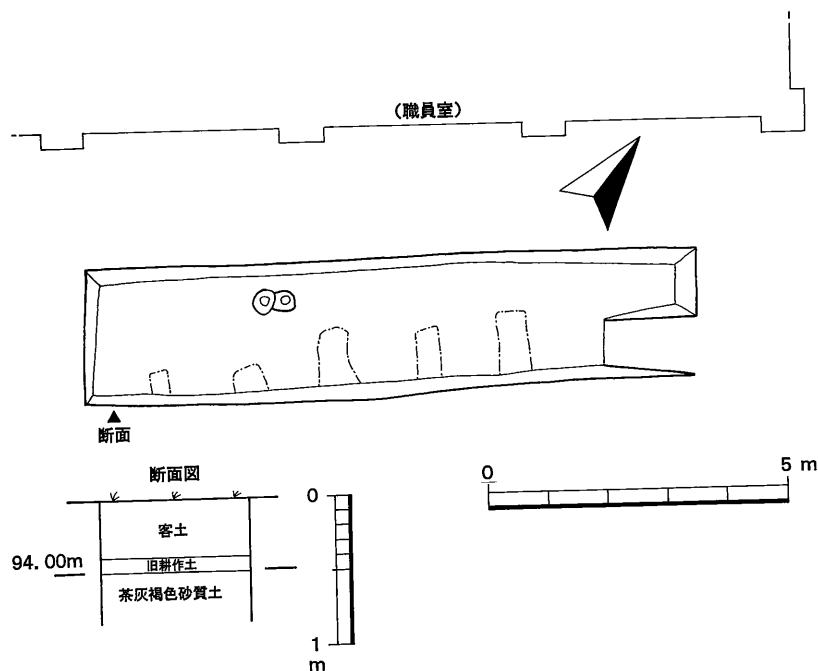


図17 T5 トレンチ遺構図

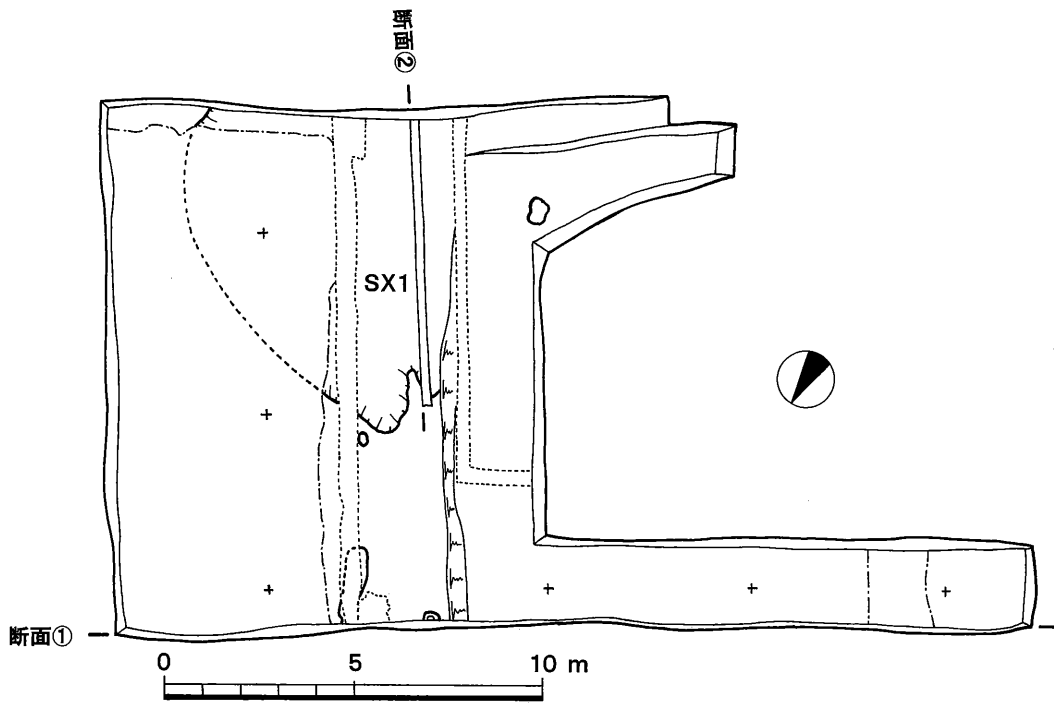


図18 T6トレンチ遺構図

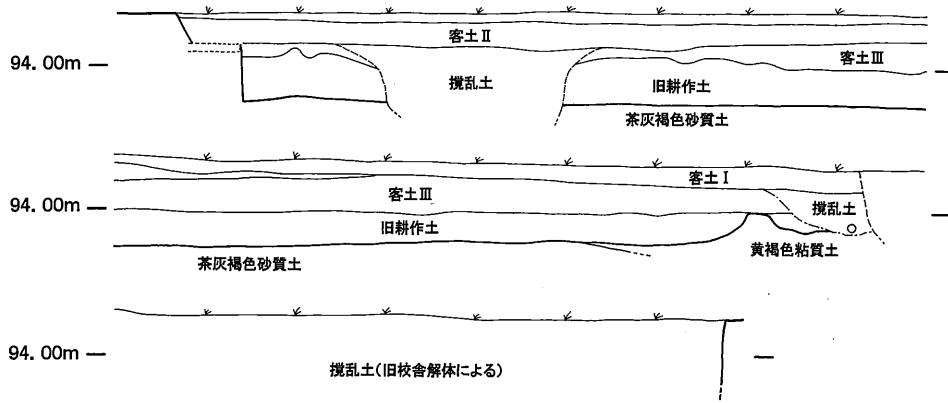


図19 断面① T6トレンチ北西壁断面図

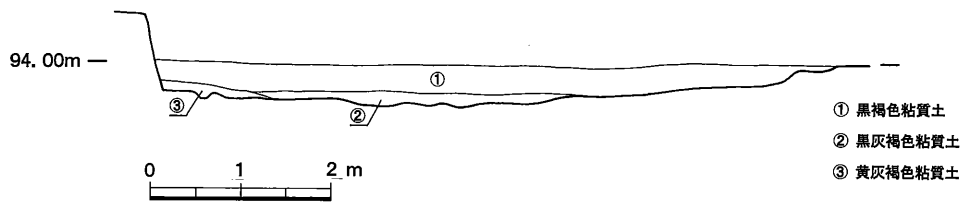


図20 断面② SX1南西壁断面図

### 3 出土遺物

福満遺跡11次調査は、T1～T5 トレンチの出土遺物は少量に終始したが、T6 トレンチではSX1を中心にコンテナ3箱程度の遺物が出土した。ここでは、T6 トレンチのSX1を中心として11次調査の出土遺物について述べる。

#### T1～T5 トレンチ 出土遺物 [図21：1・2]

それぞれのトレンチで、包含層を中心に遺物の出土が見られたが、図示できたのは2点に限られた。1は緑釉陶器の碗でT2 トレンチのSD1より出土した。高台部の破片であるが、底部糸切り後ナデを施し、貼り付け高台となっている。2は須恵器の高坏でT4 トレンチの包含層より出土した。ハ字状に短く開く脚部で、裾端部付近で屈曲し、段を有する。脚部に長方形の透しを穿っている。

#### T6 トレンチ SX1 出土遺物 [図21：3～25]

##### 土師器

##### (1) 壺 [3～8]

3～5、7は広口壺である。3は垂下状口縁を持ち、口縁帯外面には棒状浮文をもつ。4・5・7はともに口縁部が外反しながら開く。端部は、4は面を持ち5は丸く収める。6は長頸壺である。口縁部は外面は直線的に、内面は緩やかに外反しながら立ち上がる。端部は丸く収める。8は壺の底部である。底部は突出し外面にはハケ調整が施される。

##### (2) 甕 [9～18]

9～11は受口状口縁甕である。9は口縁部の立ち上がりが小さく、端部に面を形成する。10は口縁部外側面に列点文を配す。11は上方に短く立ち上がる口縁部をもつ。12・13はくの字状口縁甕である。12は直立気味の口縁部を、13は緩く外反しながら開く口縁部をもち、どちらも端部は丸く収める。14～18はS字状口縁甕である。口縁端部を外方へ強く引き出すもので体部外面には粗いハケを施す。胎土には砂礫を多く含む。

##### (3) 高坏 [19～20]

19・20は高坏である。19は屈曲して外上方に開く坏部である。20は外反気味に開く脚部である。

##### 須恵器

##### (1) 坏 [22～25]

22は須恵器坏蓋である。口縁部は内湾気味に下がり、端部は内傾する段をなす。23～25は須恵器坏身である。いずれも、断面三角形の返りを持ち、立ち上がりは内傾して内上方に伸び、端部は内傾する段をなす。

##### 土製品

##### (1) 紡錘車 [21]

21は紡錘車である。底径3.5cm、総高1.7cm、孔径0.6cmを測る。表面の摩滅が著しく、器形は丸みを帯びている。

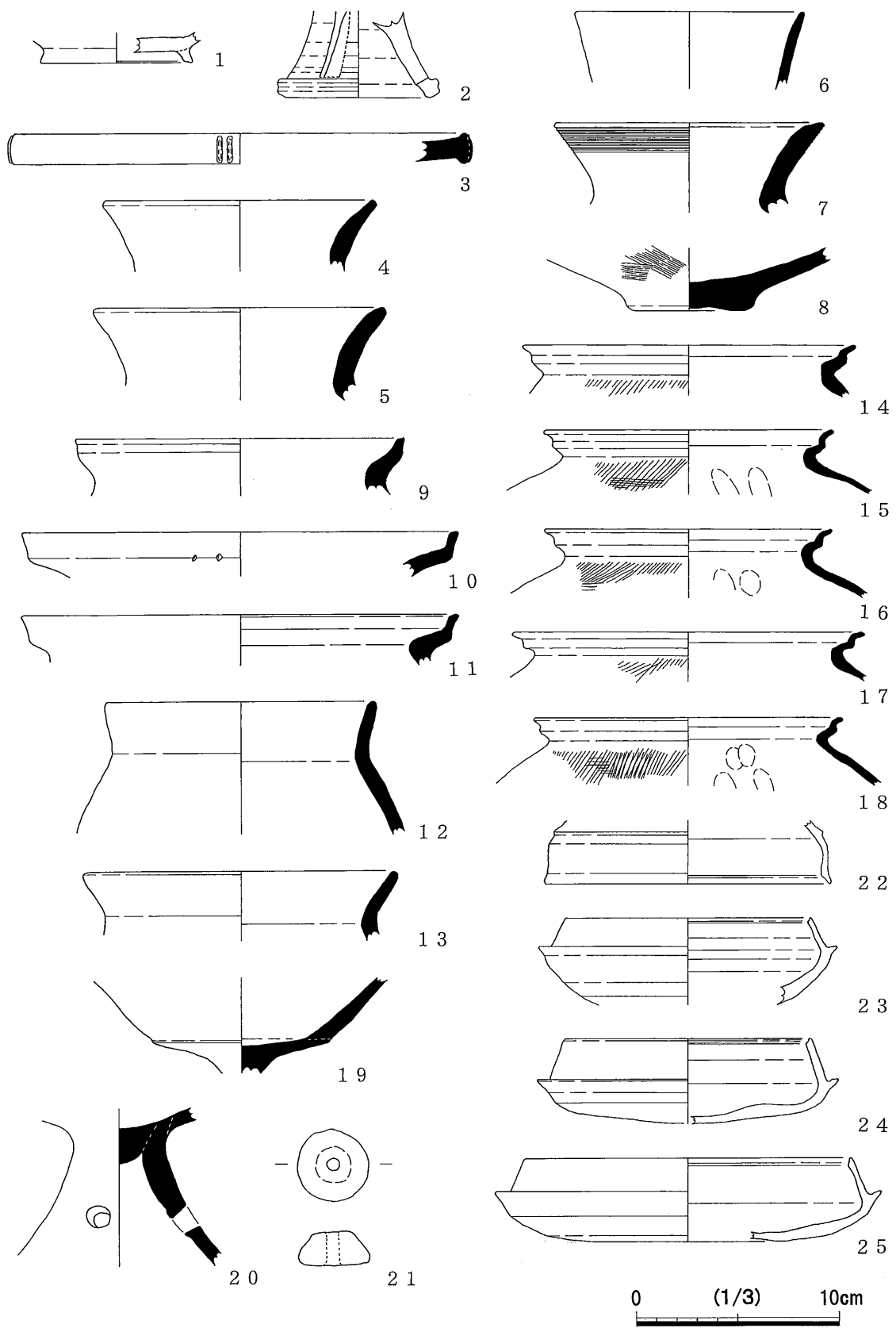


图21 第11次調査出土遺物



以上、福満遺跡11次調査の出土遺物について述べたが、T6トレンチSX1の出土遺物については、土師器は古墳時代初頭、須恵器については古墳時代後期（6世紀前半）の製作時期を与えることができるようである。

## V おわりに

今回の調査は、校舎の増築に起因するものであり、増築箇所を分散的に調査したため面的な把握という意味では制約があった。したがって旧地形の復元には有効であったが、遺構の確認は不十分なものに終始した。調査の結果、第10次調査を実施した校舎北隅および第11次調査のT3トレンチ南側からT6トレンチの北東側で微高地を確認し、これらの微高地を中心に古墳時代初頭と古墳時代後期を主体とする遺構が広がっていた。

これらの遺構の中で、第10次調査で検出した溝（SD1）と第11次調査T6トレンチの不定形な落ち込み（SX1）では、古墳時代初頭の比較的良好な遺物を得ることができた。とくにSD1の遺物は豊富であり、庄内式併行期のまとまった資料となった。その詳細は「Ⅲ-4 出土遺物の検討」に詳しいが、畿内と東海・北陸地方の結節点としての彦根という地域の特徴を雄弁に語るものであった。今後の研究の布石となる貴重な資料を提示できたと考えている。

10次調査  
遺構検出状況



10次調査  
柱穴群とSX1



10次調査  
SD1 完掘状況



10次調査  
SD1 甕 (25) 出土状況

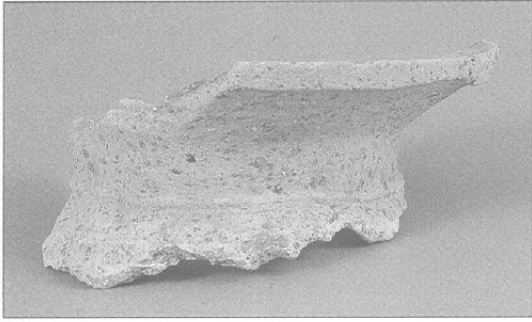


10次調査  
SD1 壺 (1) 出土状況

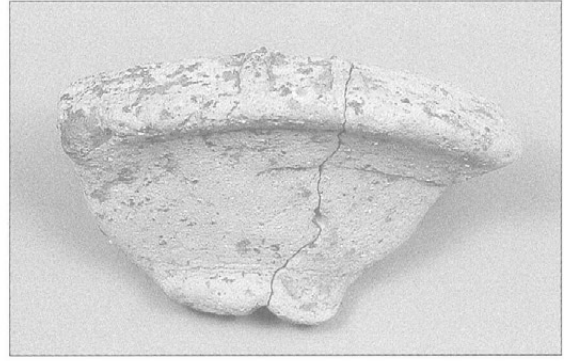


10次調査  
調査風景

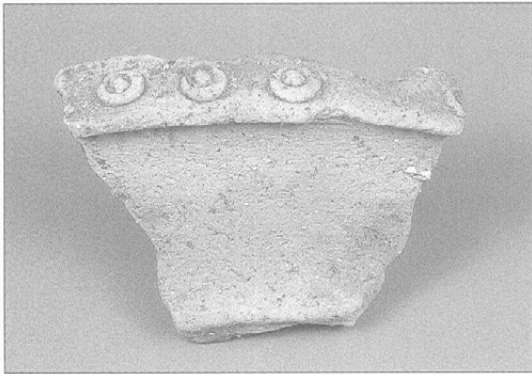




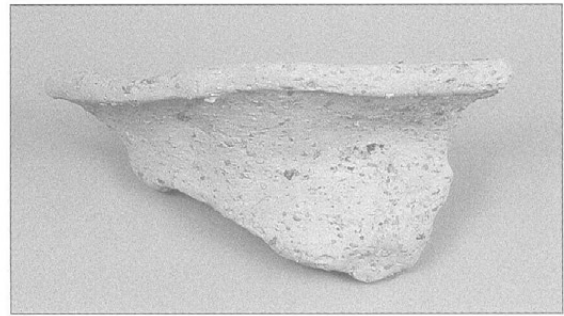
10次 SD 1-01



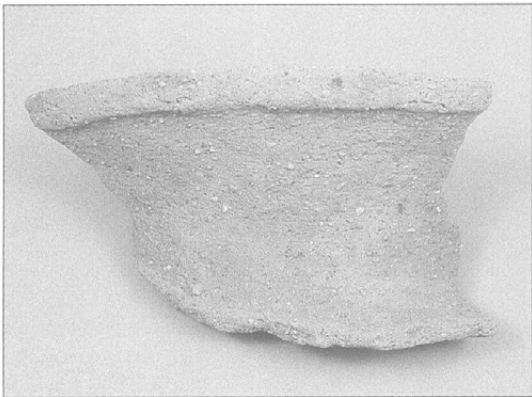
10次 SD 1-04



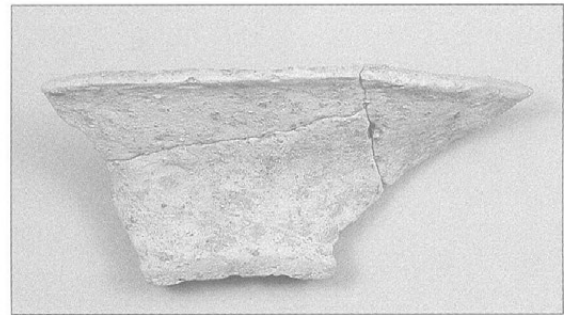
10次 SD 1-05



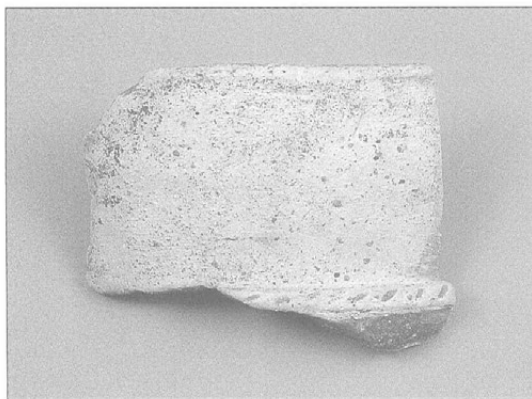
10次 SD 1-10



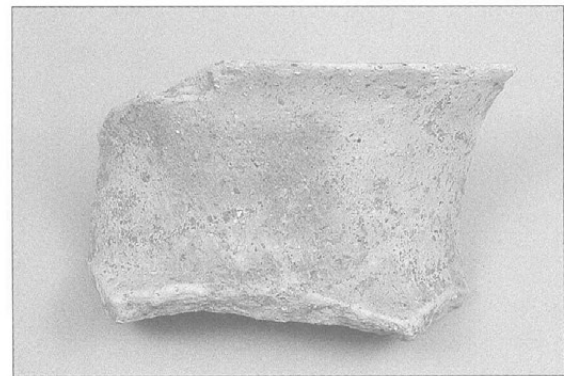
10次 SD 1-14



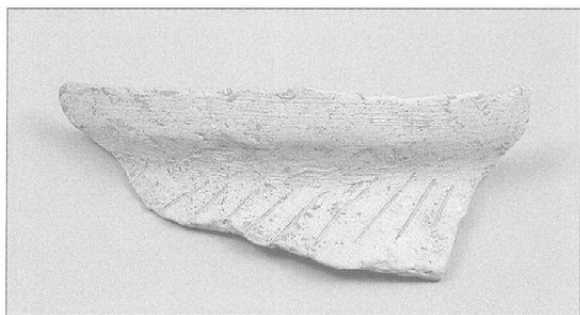
10次 SD 1-16



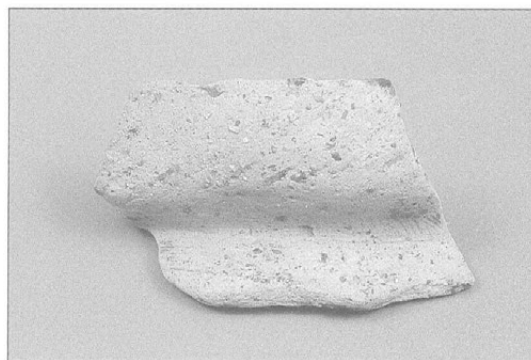
10次 SD 1-18



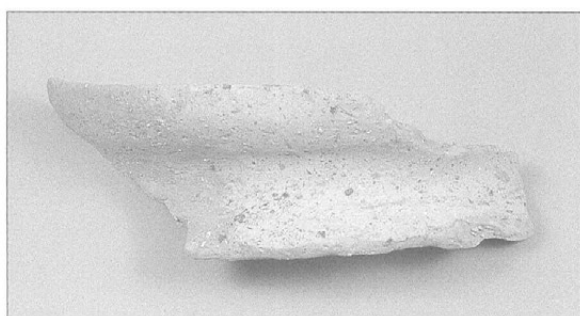
10次 SD 1-20



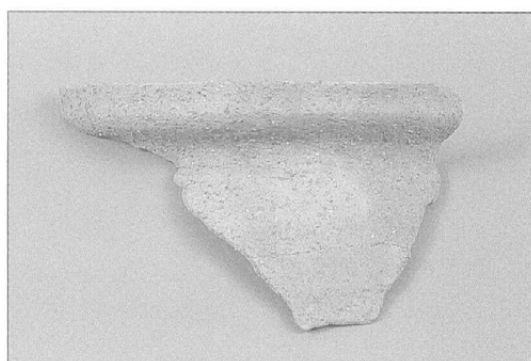
10次 SD 1-21



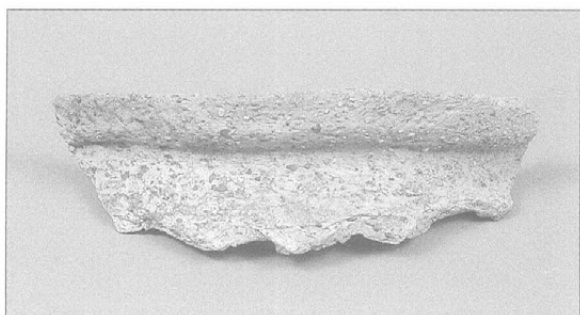
10次 SD 1-23



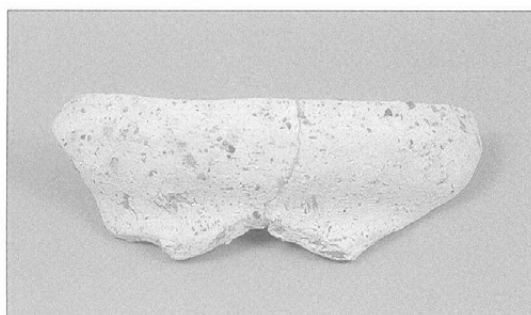
10次 SD 1-24



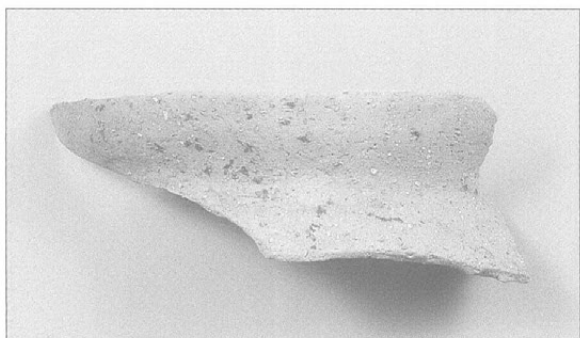
10次 SD 1-25



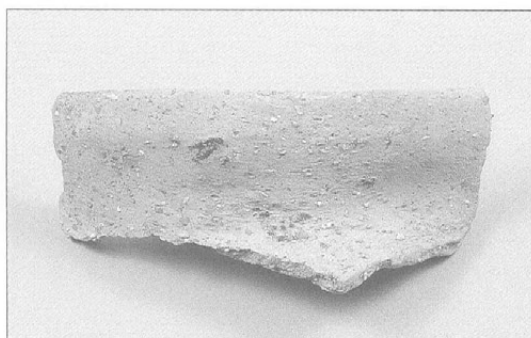
10次 SD 1-26



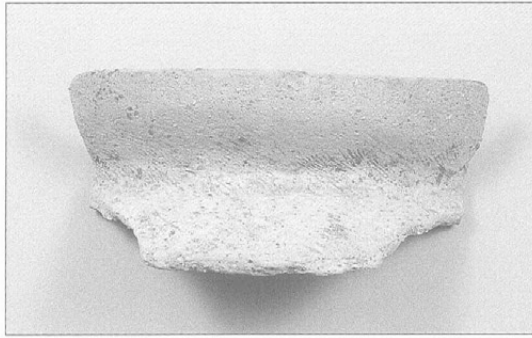
10次 SD 1-30



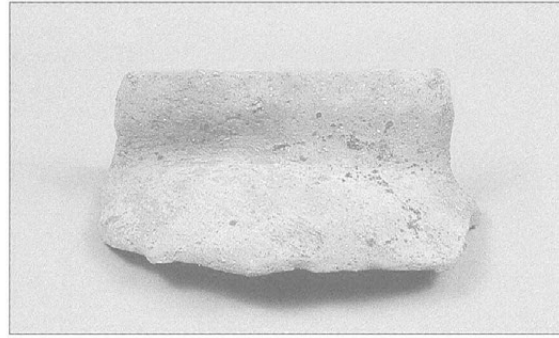
10次 SD 1-31



10次 SD 1-32



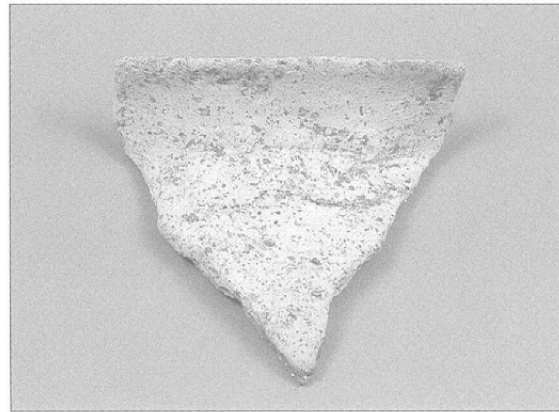
10次 SD 1-33



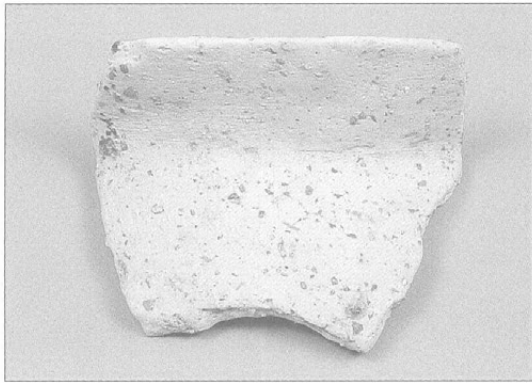
10次 SD 1-34



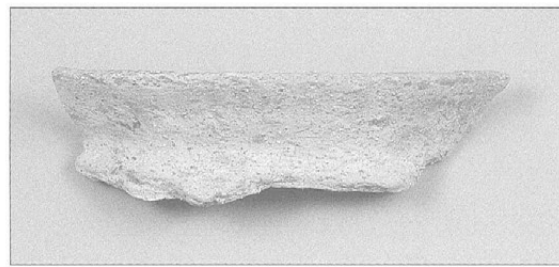
10次 SD 1-35



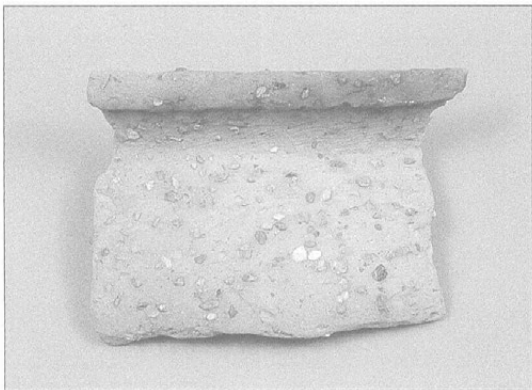
10次 SD 1-36



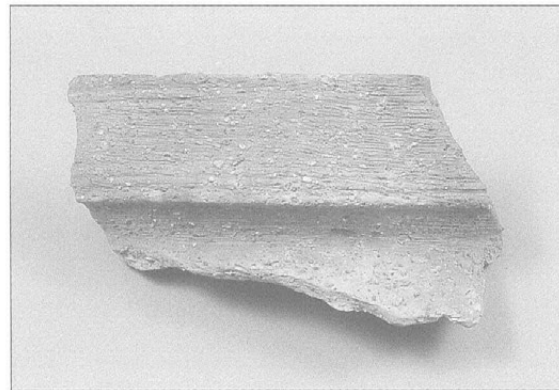
10次 SD 1-37



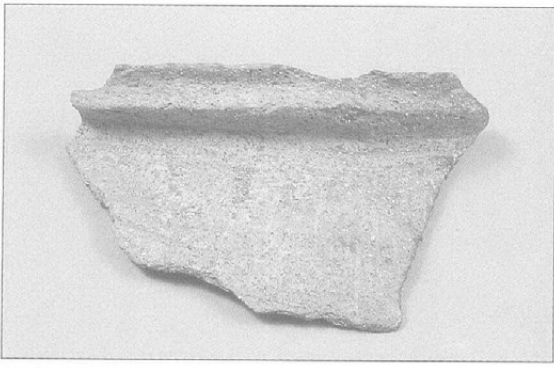
10次 SD 1-40



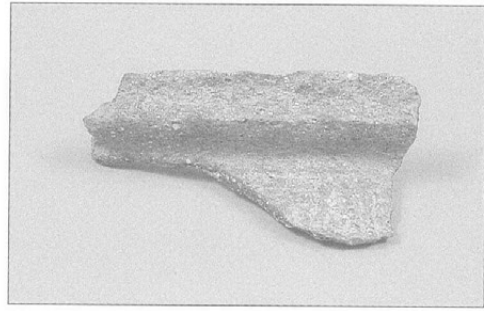
10次 SD 1-41



10次 SD 1-44



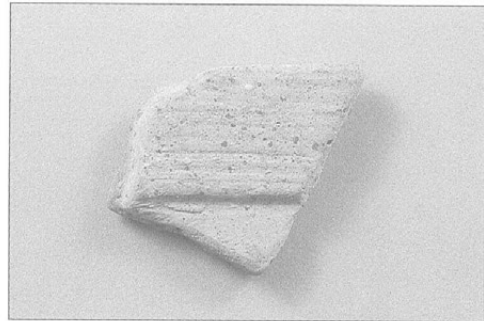
10次 SD 1-49



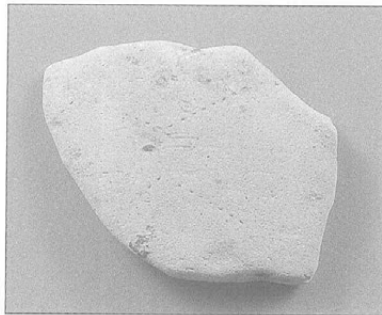
10次 SD 1-50



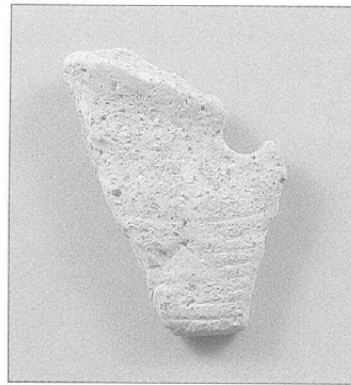
10次 SD 1-53



10次 SD 1-59



10次 SD 1-60



10次 SD 1-61



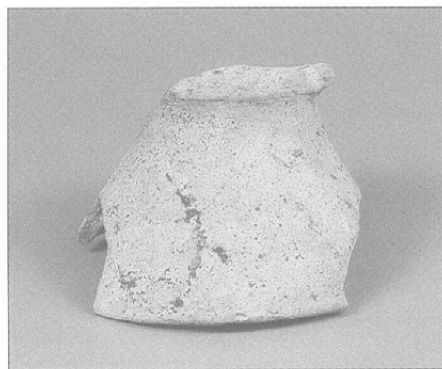
10次 SD 1-62



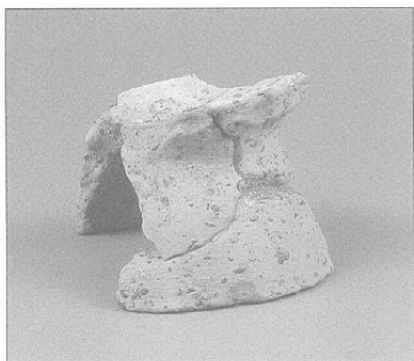
10次 SD 1-63



10次 SD 1-64



10次 SD 1-65



10次 SD 1-66



10次 SD 1-67



10次 SD 1-68



10次 SD 1-69



10次 SD 1-70



10次 SD 1-71

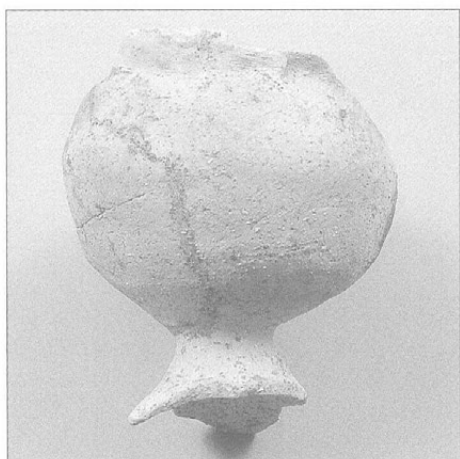




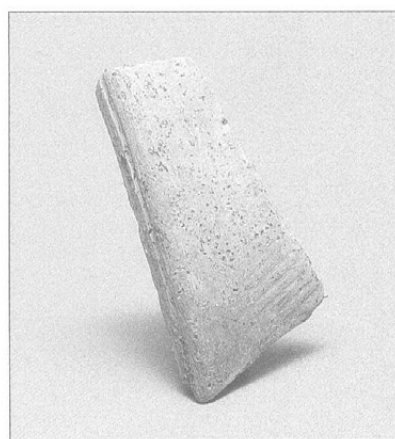
10次 SD 1-72



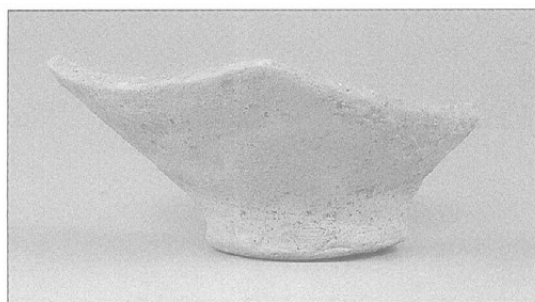
10次 SD 1-73



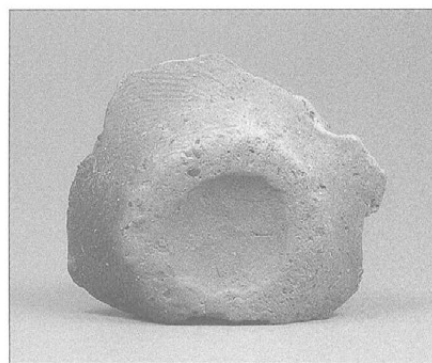
10次 SD 1-74



10次 SD 1-75



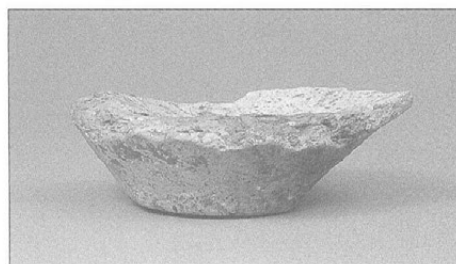
10次 SD 1-77



10次 SD 1-78



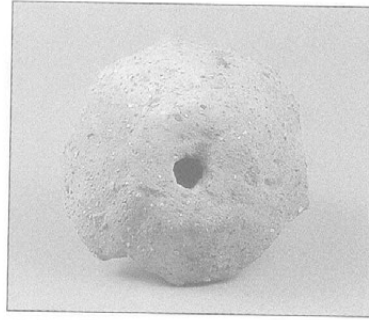
10次 SD 1-79



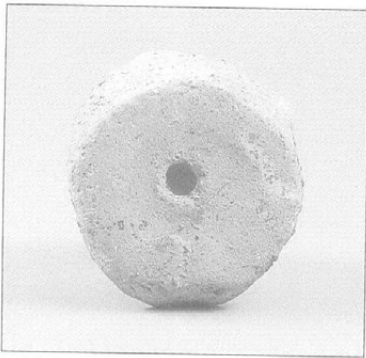
10次 SD 1-80



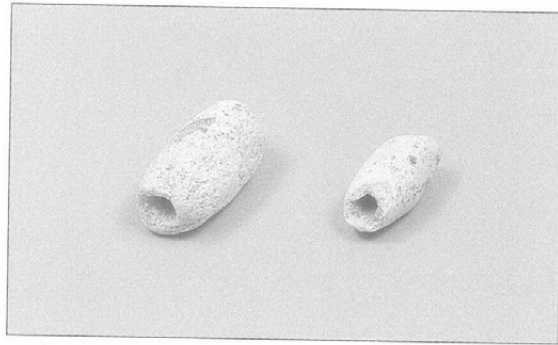
10次 SD 1-81



10次 SD 1-82



10次 SD 1-83



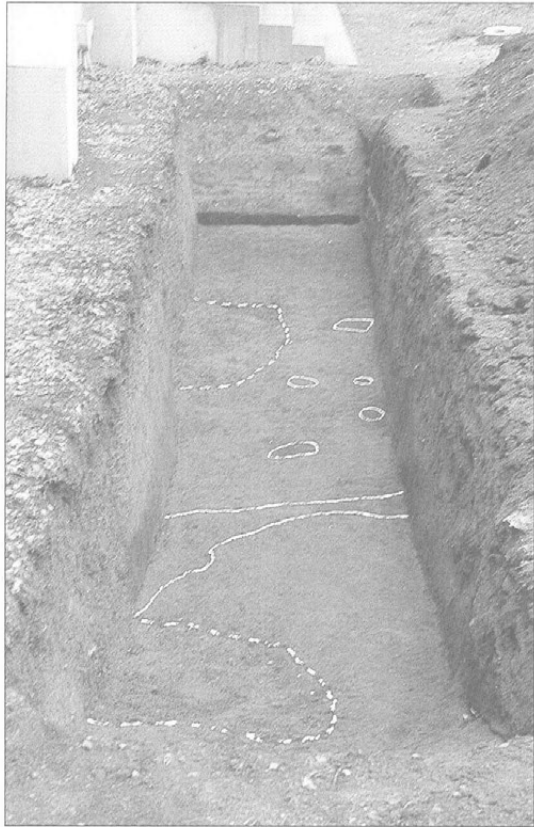
10次 SD 1-93・94



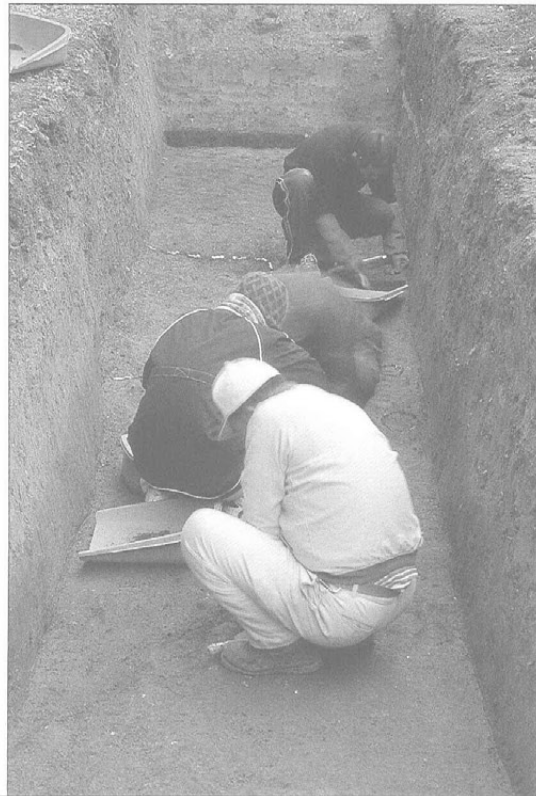
10次 SD 1-84~89



10次 SX 1-102~107



11次調査 T1 トレンチ  
遺構検出状況



11次調査 T1 トレンチ  
調査風景



11次調査  
T2 トレンチ  
遺構検出状況



11次調査 T3 トレンチ  
遺構検出状況

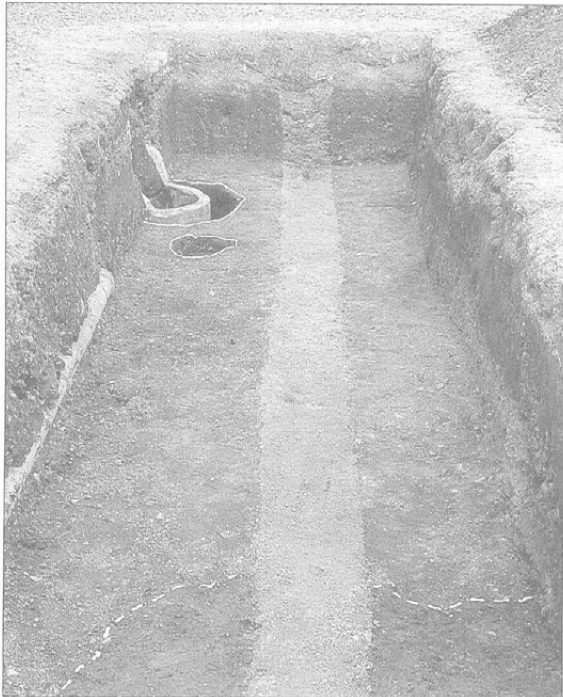
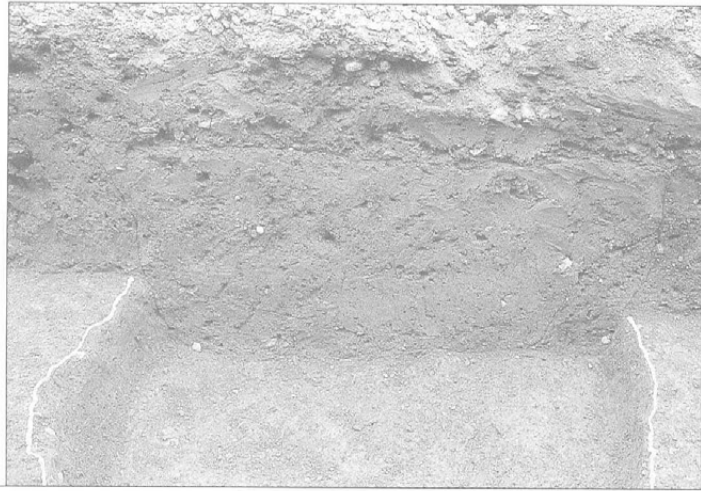


11次調査 T3 トレンチ  
SD1・SK1 調査状況



11次調査  
T3 トレンチ  
SD1 断面

11次調査  
T3 トレンチ  
SK1 断面



11次調査 T4 トレンチ  
遺構検出状況

11次調査 T4 トレンチ  
漆喰井戸検出状況



11次調査  
T5 トレンチ  
遺構検出状況



11次調査  
T6 トレンチ  
遺構検出状況



11次調査  
T6 トレンチ  
SX1 検出状況



11次調査  
T6 トレンチ  
SX1 完掘状況

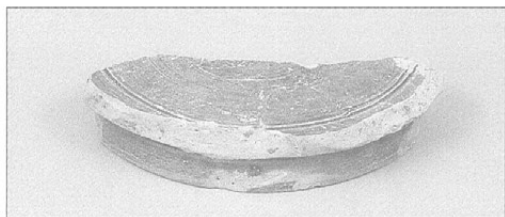


11次調査  
T6 トレンチ  
SX1 土器出土状況

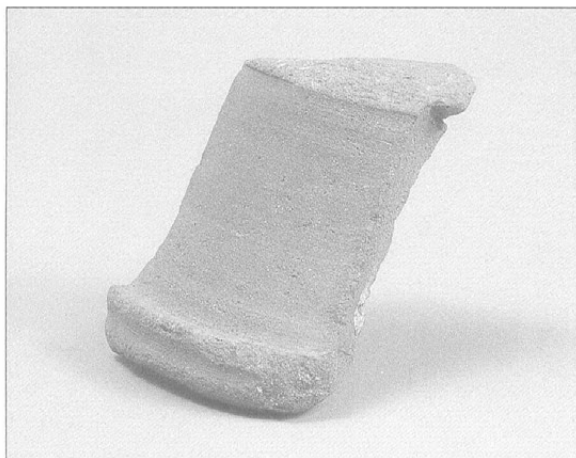
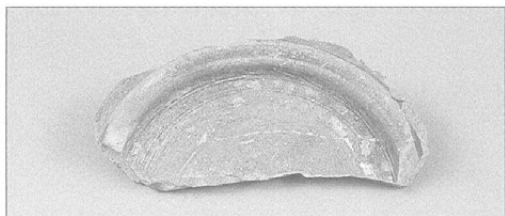


11次調査  
T6 トレンチ  
微高地より低平地を望む

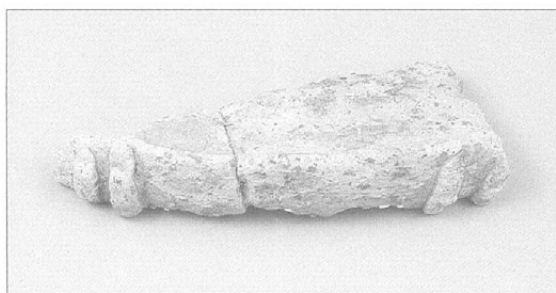




11次 T2 SD1-1



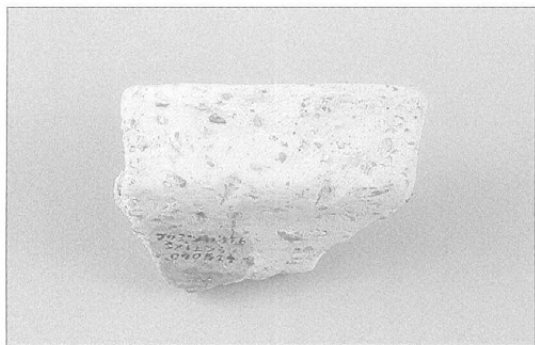
11次 T4 包含層-2



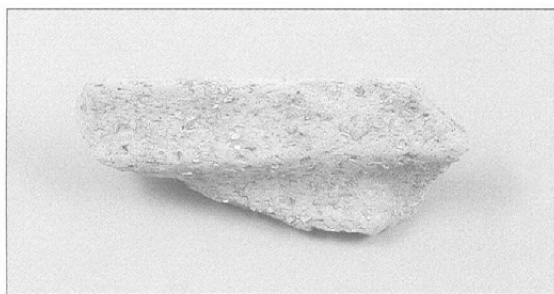
11次 T6 SX1-3



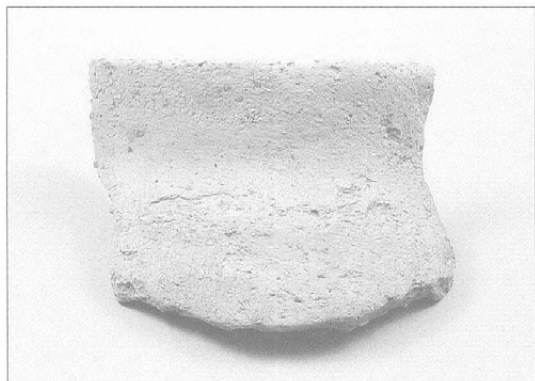
11次 T6 SX1-7



11次 T6 SX1-10



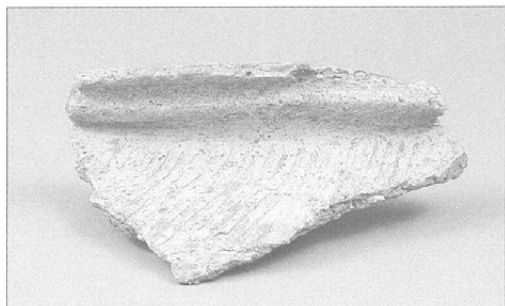
11次 T6 SX1-11



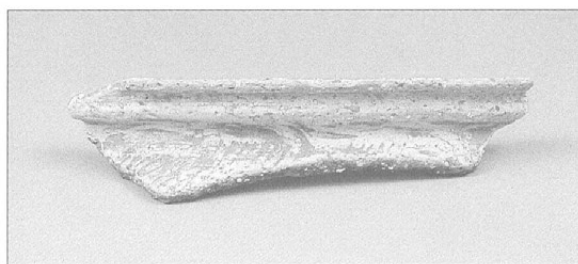
11次 T6 SX1-13



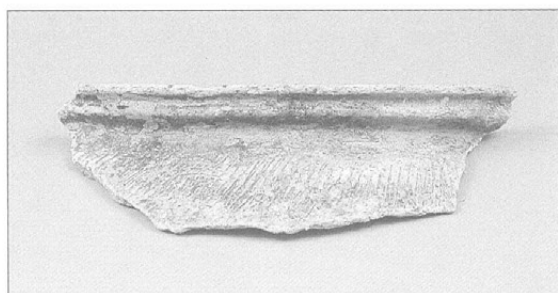
11次 T6 SX1-15



11次 T6 SX1-16



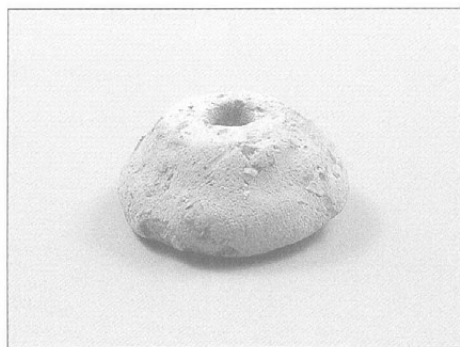
11次 T6 SX1-17



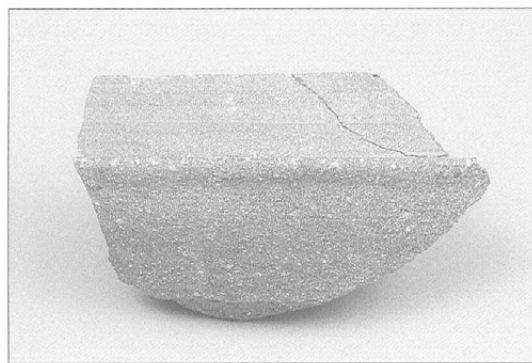
11次 T6 SX1-18



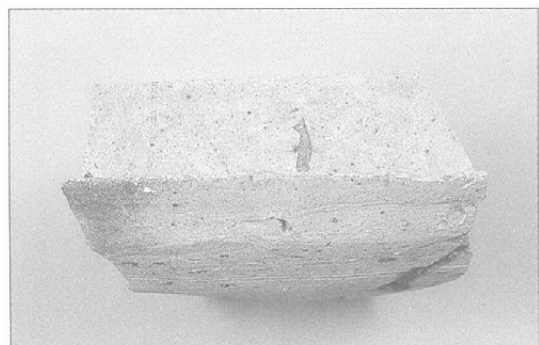
11次 T6 SX1-20



11次 T6 SX1-21



11次 T6 SX1-23



11次 T6 SX1-25

# 報告書抄録

ふりがな	ふくみついせき 10・11							
書名	福満遺跡 X・XI							
副書名	城南小学校校舎増築工事に伴う発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	40							
編著者名	谷口 徹・林 昭男・早川 圭・中居 和志							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL 0749-26-5833							
発行年月日	20080331							
しよしゅういせき 所収遺跡	しよざいち 所在地	コード		世界測地系		調査 面積	調査期間	調査 原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ふくみついせき 福満遺跡	ひこねし 彦根市  にしいまちよう 西今町  380	25202	015	35度 14分 55秒	136度 14分 35秒	451㎡	20051107～ 20051128 20061207～ 20070301 20070507～ 20070604	校舎 増築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
福満遺跡	集落	古墳初頭 古墳後期 近代	溝・柱穴など 溝状遺構など 漆喰井戸など	古式土師器 須恵器・土錘				

彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集

## 福満遺跡 X・XI

—城南小学校校舎増築工事に伴う発掘調査報告—

平成20年（2008年）3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

彦根市尾末町1番38号

TEL 0749-26-5833

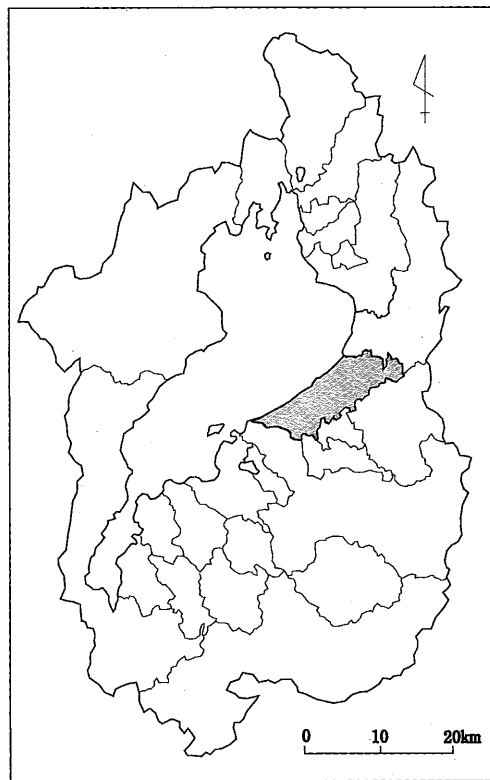
印刷・製本：サンメッセ株式会社

〒522-0043

滋賀県彦根市小泉町300番地9

TEL 0749-21-3211

# SITE OF FUKUMITSU



March, 2008

Hikone Educational Bureau  
Cultural Asset Division